

令和 5 年度
東大和市ひきこもり実態調査
結果報告書

令和 6 年 3 月
東大和市

目次

はじめに	P. 1
【I. 調査概要】	
1. 調査目的	2. 調査対象者
4. 調査内容	3. 調査方法
5. 調査期間	
【II. 調査結果】	
1. 調査結果	P. 3
2. 群分け定義	P. 3～4
3. 各問の集計結果	P. 5～67
【III. まとめ資料】	
1. 考察	P. 68～70
2. おわりに	P. 70
3. 東大和市で行っている支援について	P. 71～72
4. 資料（調査に使用した調査票等）	P. 73～77

はじめに

“ひきこもり”は、様々な要因により学校や職場などに通えなくなり、家族以外の人との交流が極端に少なくなり、社会参加をしていない状態を指します。生きるためのエネルギーが枯渇した状態であるとも言われております。

ひきこもりの状態にある人は、令和4年度に行われた内閣府調査によると、全国にひきこもり状態にある人が、およそ146万人と推計されています。年齢別のひきこもり率は、39歳以下の層で約2.1%、40歳～64歳の層でも約2.0%です。ひきこもり当事者のうち、女性の割合が40歳～64歳の層で52.3%を超えております。

ひきこもり当事者の多くが「なんとかしたい」と悩み、言葉にできない生きづらさや葛藤を抱えています。しかし、その実態を捉えることは難しく、適切な支援が行き届いておりません。また、依然として、甘えや怠けであるとの誤解・偏見もいまだ根強く残っています。

前述の内閣府調査では、ひきこもりの主な要因が「退職したこと」や「人間関係がうまくいかなかったこと」などであることが明らかとなりました。このことは、ひきこもりがどのような家庭でも起こりうることを示しており、個人や家族だけでなく、社会全体で取り組むべき課題であると考えられます。

東大和市では、市内のひきこもりの現状の把握と、当事者のニーズを明らかにし、効果的な支援につなげるために、ひきこもりに関する実態調査を実施いたしました。この調査においては、7,000を超える世帯からご回答をいただきました。この報告書は、これらの貴重なご回答内容を取りまとめたものです。

多くの市民の皆様のご協力に、深く感謝申し上げます。

I . 調査概要

1. 調査目的

調査を通じて、ひきこもり当事者がいる世帯の生活実態等を把握し、潜在的な需要や生活上の様々な課題を発見し、ひきこもり支援のための福祉施策の構築に役立てる。

2. 調査対象者

市内に居住する満 15 歳以上 64 歳以下の方が属する世帯

なお、調査対象世帯数は、28,542 世帯であった。

(令和 5 年 1 月 1 日現在の住民基本台帳による。)

3. 調査方法

調査票を郵送のうえ、同封の返信用封筒にて郵送回答とした。なお、web 回答も併用した。

※調査票は、巻末参考資料を参照

4. 調査内容

- ア、基本情報(世帯内におけるひきこもり状態にある方の有無や回答者の年齢・属性など)
- イ、外出状況ときっかけ(現在の外出状況の確認やその状態になるきっかけや時期など)
- ウ、交流・経済状態(直近 6 か月の交流状況と収入源など)
- エ、心配ごとや自己認識(現在の心配事や、現状について)
- オ、社会参加について(社会参加することへの壁や、受け入れる側の体制について)
- カ、必要なサービス(現在展開しているサービスの認知度、またそれ以外のサービスニーズについて※自由記入)

5. 調査期間

令和 5 年 12 月 19 日から 令和 6 年 1 月 12 日まで。

注意

※割合は小数第一位で四捨五入しておりますので、合計は必ずしも 100.0% となりません。(以下、全設問で同様です。)

II. 調査結果

1. 調査結果

28,542 通を送付、7,229 件の回答あり（紙回答：4,218 件、web 回答：3,011 件）

2. 群分け定義

潜在的な需要や問題を広く汲み取るために、調査によって得られたデータを、次ページの 6 群に分類して集計した。なお、本件調査におけるひきこもりの定義は次のとおりである。

社会的参加（義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家族以外の人との交流など）をしておらず、概ね家庭にとどまり続けている状態（他者と交わらない形での外出をしている場合も含む）。

一度は社会復帰するものの、断続的に家庭に留まり続けてしまっている状態も含む。

群	定義	群分けの手続き
A 群	「ひきこもりがいない世帯」 社会的参加をしており、概ね家庭にとどまり続けている状態ではない。	問(1)の「0人」に該当
B 群	「広義のひきこもり」 統合失調症や身体的病気・障害によるものではなく、6か月以上にわたり社会的参加をしておらず、概ね家庭にとどまり続けている状態。	C群とD群の合計
C 群	「準ひきこもり」 統合失調症や身体的病気・障害によるものではなく、6か月以上にわたり社会的参加をしておらず、概ね家庭にとどまり続けている状態で、趣味に関する用事のときだけ外出する。	問(1)の「1人」「2人」「3人以上」に該当 問(7)の「1.普段は家にいるが、自分の趣味に関する用事のときだけ外出する」に該当 問(8)の「6か月以上」に該当
D 群	「狭義のひきこもり」 統合失調症や身体的病気・障害によるものではなく、6か月以上にわたり社会的参加をしておらず、概ね家庭にとどまり続けている状態で、外出頻度が少ない、もしくは外出がない。	問(1)の「1人」「2人」「3人以上」に該当 問(7)の「2.普段は家にいるが、コンビニや散歩などには出かける」「3.自室からは出るが、家からは出ない」「4.自室からほとんど出ない」に該当 問(8)の「6か月以上」に該当
E 群	「6か月未満の広義のひきこもり」 統合失調症や身体的病気・障害によるものではなく、6か月未満ではあるが社会的参加をしておらず、概ね家庭にとどまり続けている状態。	問(1)の「1人」「2人」「3人以上」に該当 問(7)の「1.普段は家にいるが、自分の趣味に関する用事のときだけ外出する」「2.普段は家にいるが、コンビニや散歩などには出かける」「3.自室からは出るが、家からは出ない」「4.自室からほとんど出ない」に該当 問(8)の「6か月未満」に該当
F 群	「統合失調症や身体的病気・障害によるもの」 統合失調症や身体的病気・障害により、社会的参加をしておらず、概ね家庭にとどまり続けている状態。	問(1)の「1人」「2人」「3人以上」に該当 問(10)の「10.病気」「11.障害」に該当し、統合失調症、身体的病気・障害の記入有り

3. 各問の集計結果

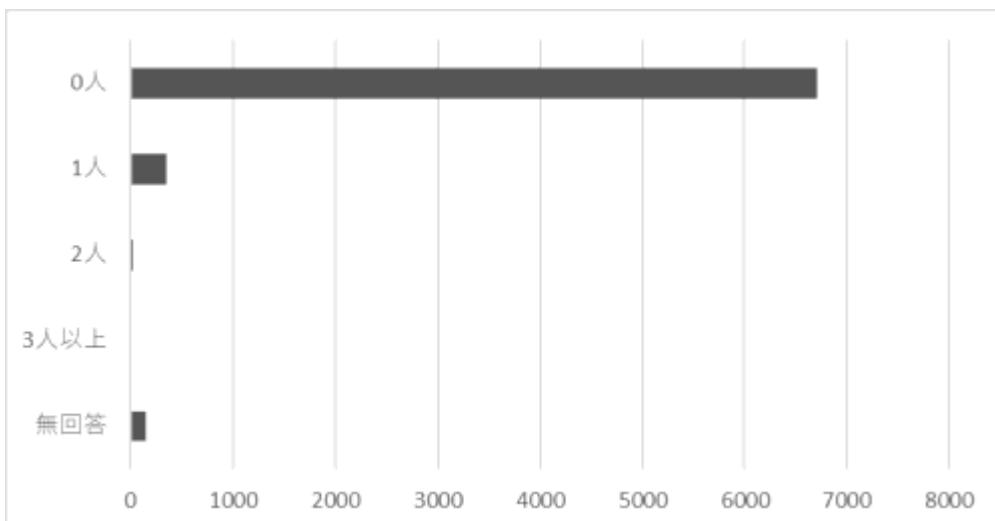
【ひきこもり状態にある方の人数と割合】

問1「あなたの世帯でひきこもり状態にある方の人数をお答えください。(1つだけ回答)」という質問に対する結果は以下のとおりであった (Table 1-1)。

Table 1-1 (表) ひきこもり状態にある方の人数と割合

区分	対象数	割合
0人	6,712	92.8%
1人	347	4.8%
2人	23	0.3%
3人以上	1	0.1%
無回答	146	2.0%
合計	7,229	100.0%

Table 1-1 (グラフ) ひきこもり状態にある方の人数と割合



最も多いかったのは「0人」であり、6,712件で92.8%であった。続いて「1人」が347件で4.8%、「2人」が23件で0.3%、「3人以上」が1件で0.1%であった。ひきこもり状態にある方が1人以上いると答えた世帯が371件であった。

【各群の件数と割合】

群分けの手続きを行い、各区分の件数と割合は以下のとおりであった（Table 1-2）。

Table 1-2 (表) 各群の件数と割合

区分		区分内容		対象数	
A群		ひきこもりがいない世帯		6,712	92.8%
B群	C群	広義のひきこもり	準ひきこもり	273	3.8% 1.6%
	D群	狭義のひきこもり			159 2.2%
E群		6か月未満の広義のひきこもり状態		14	0.2%
F群		統合失調症や身体的病気・障害によるもの		71	1.0%
A群～F群以外		未記入などで群分けされなかったもの		159	2.2%
合計				7,229	100.0%

A群は6,712件で92.8%であった。B群は273世帯で3.8%、C群は114世帯で1.6%、D群は159世帯で2.2%であり、E群は14世帯で0.2%、F群は71世帯で1.0%であった。上記の結果から、A群、B群、F群、E群の順に高く、B群の中では、狭義のひきこもり（D群）が準ひきこもり（C群）よりも0.6%高かった。

ひきこもり状態にある方が1人以上いる世帯の割合をもとに、東大和市全世帯の推計値を求める以下とおりであった。B群（C群+D群）+E群+F群が1,413.5世帯、B群が1,077.9世帯、C群が450.1世帯、D群が627.8世帯、E群が55.3世帯、F群が280.3世帯であった（調査対象世帯数、28,542世帯で算出）。

※A群：ひきこもりがいない世帯 B群：広義のひきこもり C群：準ひきこもり D群：狭義のひきこもり

E群：6か月未満の広義のひきこもり F群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

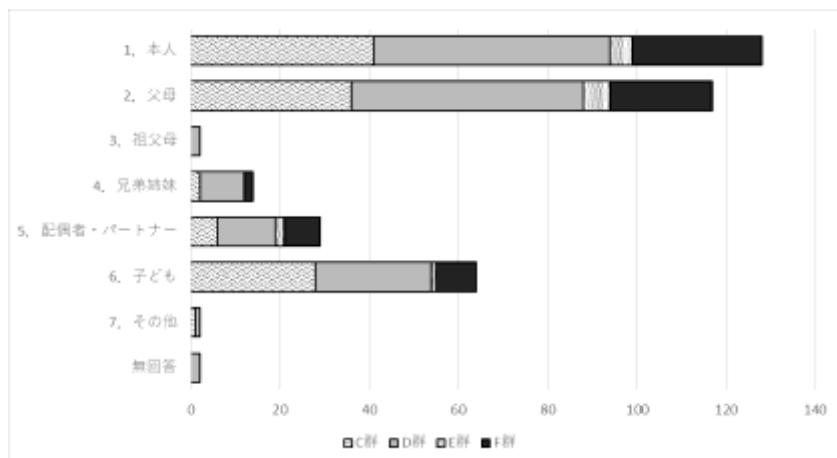
【回答者の属性】

問2「ひきこもり状態にある方から見て、あなたはどのような関係になりますか。(1つだけ回答)」という質問の結果から、回答者の属性は以下のとおりであった (Table 2)。

Table 2 (表) 回答者の属性

区分	全体	B	C		D		E		F	
			C群	D群	E群	F群				
1. 本人	128	35.8%	94	26.3%	41	11.5%	53	14.8%	5	1.4%
2. 父母	117	32.7%	88	24.6%	36	10.1%	52	14.5%	6	1.7%
3. 祖父母	2	0.6%	2	0.6%	0	0.0%	2	0.6%	0	0.0%
4. 兄弟姉妹	14	3.9%	12	3.4%	2	0.6%	10	2.8%	0	0.0%
5. 配偶者・パートナー	29	8.1%	19	5.3%	6	1.7%	13	3.6%	2	0.6%
6. 子ども	64	17.9%	54	15.1%	28	7.8%	26	7.3%	1	0.3%
7. その他	2	0.6%	2	0.6%	1	0.3%	1	0.3%	0	0.0%
無回答	2	0.6%	2	0.6%	0	0.0%	2	0.6%	0	0.0%
合計	358	100.0%	273	76.3%	114	31.8%	159	44.4%	14	3.9%
									71	19.8%

Table 2 (グラフ) 回答者の属性



最も多かったのは「本人」による回答で、128件で35.8%であった。続いて高かったのは「父母」による回答で、117件で32.7%であった。次いで「子ども」による回答が64件で17.9%、「配偶者・パートナー」による回答が29件で8.1%、「兄弟姉妹」による回答が14件で3.9%であった。

B群において、最も多かったのは「本人」による回答で、94件で26.3%であった。続いて高かったのは「父母」による回答で、88件で24.6%であった。次いで「子ども」による回答が54件で15.1%、「配偶者・パートナー」による回答が19件で5.3%、「兄弟姉妹」による回答が12件で3.4%であった。

※A群：ひきこもりがない世帯 B群：広義のひきこもり C群：準ひきこもり D群：狭義のひきこもり

E群：6か月未満の広義のひきこもり F群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

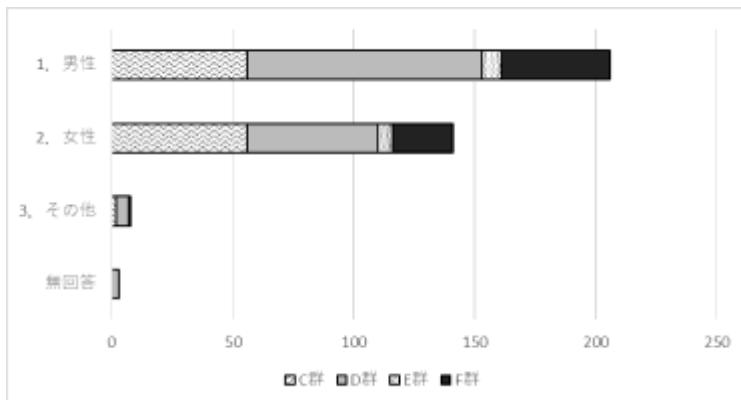
【ひきこもり状態にある方の性別】

問3「ひきこもり状態にある方の性別をお答えください。(1つだけ回答)」という質問の結果から、ひきこもり状態にある方の性別は以下のとおりであった (Table 3)。

Table 3 (表) ひきこもり状態にある方の性別

区分	全体		B		C		D		E		F	
1. 男性	206	57.5%	153	42.7%	56	15.6%	97	27.1%	8	2.2%	45	12.6%
2. 女性	141	39.4%	110	30.7%	56	15.6%	54	15.1%	6	1.7%	25	7.0%
3. その他	8	2.2%	7	2.0%	2	0.6%	5	1.4%	0	0.0%	1	0.3%
無回答	3	0.8%	3	0.8%	0	0.0%	3	0.8%	0	0.0%	0	0.0%
合計	358	100.0%	273	76.3%	114	31.8%	159	44.4%	14	3.9%	71	19.8%

Table 3 (グラフ) ひきこもり状態にある方の性別



「男性」が 206 件で 57.5%、「女性」が 141 件で 39.4%であり、男性の方が 18.1%多かった。続いて、「その他」が 8 件で 2.2%、「無回答」が 3 件で 0.8%であった。

B 群において、「男性」が 153 件で 42.7%、「女性」が 110 件で 30.7%であり、男性の方が 12.0%多かった。続いて、「その他」が 7 件で 2.0%、「無回答」が 3 件で 0.8%であった。C 群は「男性」が 56 件で 15.6%、「女性」が 56 件で 15.6%と差がないのに対して、D 群は「男性」が 97 件で 27.1%、「女性」が 54 件で 15.1%となっており、「女性」よりも「男性」の方が 12.0%高かった。

〈結果〉

全体、B 群とともに性別の割合は女性よりも男性の方が多く、D 群の差から女性よりも男性の方がひきこもり状態の程度が強い可能性が示された。

※A 群：ひきこもりがない世帯 B 群：広義のひきこもり C 群：準ひきこもり D 群：狭義のひきこもり

E 群：6か月未満の広義のひきこもり F 群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

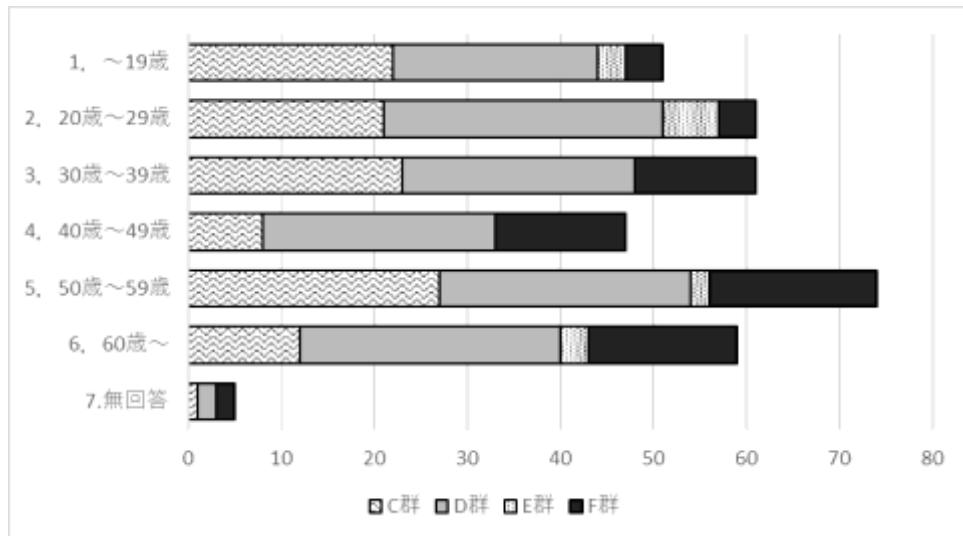
【ひきこもり状態にある方の年齢層】

問4 「その方の年齢をお答えください。(1つだけ回答) ※令和5年12月1日現在の年齢をお答えください。」という質問の結果から、ひきこもり状態にある方の年齢層は以下のとおりであった (Table 4)。

Table 4 (表) ひきこもり状態にある方の年齢層

区分	全体	B		C	D	E		F	
1. ~19歳	51 14.2%	44	12.3%	22	6.1%	22	6.1%	3	0.8%
2. 20歳~29歳	61 17.0%	51	14.2%	21	5.9%	30	8.4%	6	1.7%
3. 30歳~39歳	61 17.0%	48	13.4%	23	6.4%	25	7.0%	0	0.0%
4. 40歳~49歳	47 13.1%	33	9.2%	8	2.2%	25	7.0%	0	0.0%
5. 50歳~59歳	74 20.7%	54	15.1%	27	7.5%	27	7.5%	2	0.6%
6. 60歳~	59 16.5%	40	11.2%	12	3.4%	28	7.8%	3	0.8%
7.無回答	5 1.4%	3	0.8%	1	0.3%	2	0.6%	0	0.0%
合計	358 100.0%	273	76.3%	114	31.8%	159	44.4%	14	3.9%
								71	19.8%

Table 4 (グラフ) ひきこもり状態にある方の年齢層



最も高かったのは「50~59 歳」で、74 件で 20.7% であった。続いて高かったのは「20~29 歳」「30~39 歳」が 61 件で 17.0% であった。次いで「60 歳以上」が 59 件で 16.5%、「19 歳以下」が 51 件で 14.2%、「40~49 歳」が 47 件で 13.1% であった。

B 群において、最も高かったのは「50~59 歳」で、54 件で 15.1% であった。続いて高かったのは「20~29 歳」で、51 件で 14.2% であった。次いで「30~39 歳」が 48 件で 13.4%、「19 歳以下」が 44 件で 12.3%、「60 歳以上」が 40 件で 11.2%、「40~49 歳」が 33 件で 9.2% であった。

〈結果〉

全体では、50歳以降の年齢層が相対的に高い割合であった。健康上の問題などを抱えるためにひきこもりがちになっている可能性が考えられる。一方、B群では39歳までの若年層も50歳以降の高年齢層と同程度の割合であった。

※A群：ひきこもりがない世帯 B群：広義のひきこもり C群：準ひきこもり D群：狭義のひきこもり
E群：6か月未満の広義のひきこもり F群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

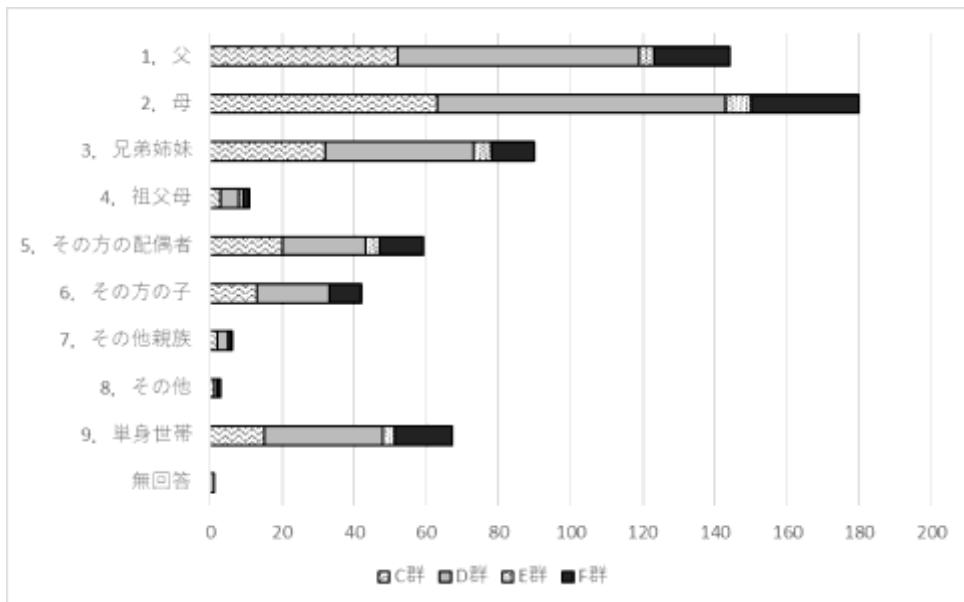
【ひきこもり状態にある方の同居者】

問5 「現在、その方と同居している方をお答えください。なお、「配偶者」には、婚姻の届出をしていないが、事実上婚姻と同様の状態にある方を含めます。(複数回答可)」という質問の結果から、ひきこもり状態にある方の同居者は以下のとおりであった (Table 5)。

Table 5 (表) ひきこもり状態にある方の同居者

区分	全体		B		C		D		E		F	
1. 父	144	23.9%	119	19.7%	52	8.6%	67	11.1%	4	0.7%	21	3.5%
2. 母	180	29.9%	143	23.7%	63	10.4%	80	13.3%	7	1.2%	30	5.0%
3. 兄弟姉妹	90	14.9%	73	12.1%	32	5.3%	41	6.8%	5	0.8%	12	2.0%
4. 祖父母	11	1.8%	8	1.3%	3	0.5%	5	0.8%	1	0.2%	2	0.3%
5. その方の配偶者	59	9.8%	43	7.1%	20	3.3%	23	3.8%	4	0.7%	12	2.0%
6. その方の子	42	7.0%	33	5.5%	13	2.2%	20	3.3%	0	0.0%	9	1.5%
7. その他親族	6	1.0%	5	0.8%	2	0.3%	3	0.5%	0	0.0%	1	0.2%
8. その他	3	0.5%	2	0.3%	1	0.2%	1	0.2%	0	0.0%	1	0.2%
9. 単身世帯	67	11.1%	48	8.0%	15	2.5%	33	5.5%	3	0.5%	16	2.7%
無回答	1	0.2%	1	0.2%	0	0.0%	1	0.2%	0	0.0%	0	0.0%
合計	603	100.0%	475	78.8%	201	33.3%	274	45.4%	24	4.0%	104	17.2%

Table 5 (グラフ) ひきこもり状態にある方の同居者



最も高かったのは「母」であり、180件で29.9%であった。続いて高かったのは「父」であり、144件で23.9%であった。次いで、「兄弟姉妹」が90件で14.9%、「単身世帯」が67件で11.1%、「その方の配偶者」が59件で9.8%、「その方の子」が42件で7.0%であった。

B群において、最も高かったのは「母」であり、143件で23.7%であった。続いて高かったのは「父」であり、119件で19.7%であった。次いで、「兄弟姉妹」が73件で12.1%、「単身世帯」が48件で8.0%、「その方の配偶者」が43件で7.1%、「その方の子」が33件

で 5.5% であった。

〈結果〉

上記の結果から、全体、B 群ともに、両親や兄弟姉妹といった家族と同居していることが最も多く、続いて単身世帯、配偶者や子供と同居していることが多いことが示された。

※A 群：ひきこもりがいない世帯 B 群：広義のひきこもり C 群：準ひきこもり D 群：狭義のひきこもり
E 群：6か月未満の広義のひきこもり F 群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

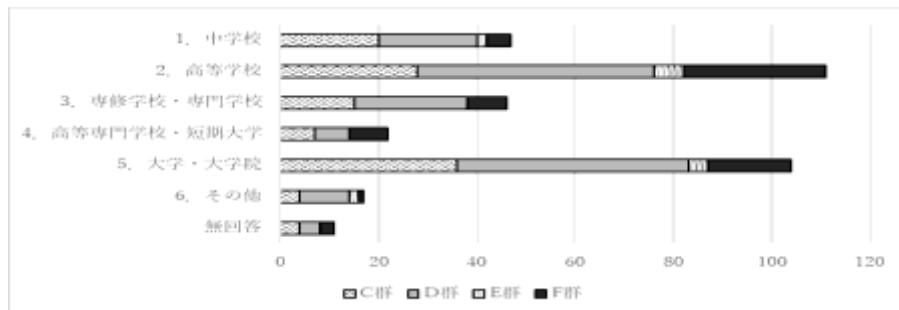
【ひきこもり状態にある方の最終学歴】

問6「その方が最後に卒業（中退を含む）した学校はどこですか。在学中の方は、現在在学している学校をお答えください。（1つだけ回答）」という質問の結果から、ひきこもり状態にある方の最終学歴は以下のとおりであった（Table 6）。

Table 6（表） ひきこもり状態にある方の最終学歴

区分	全体		B		C		D		E		F	
1. 中学校	47	13.1%	40	11.2%	20	5.6%	20	5.6%	2	0.6%	5	1.4%
2. 高等学校	111	31.0%	76	21.2%	28	7.8%	48	13.4%	6	1.7%	29	8.1%
3. 専修学校・専門学校	46	12.8%	38	10.6%	15	4.2%	23	6.4%	0	0.0%	8	2.2%
4. 高等専門学校・短期大学	22	6.1%	14	3.9%	7	2.0%	7	2.0%	0	0.0%	8	2.2%
5. 大学・大学院	104	29.1%	83	23.2%	36	10.1%	47	13.1%	4	1.1%	17	4.7%
6. その他	17	4.7%	14	3.9%	4	1.1%	10	2.8%	2	0.6%	1	0.3%
無回答	11	3.1%	8	2.2%	4	1.1%	4	1.1%	0	0.0%	3	0.8%
合計	358	100.0%	273	76.3%	114	31.8%	159	44.4%	14	3.9%	71	19.8%

Table 6（グラフ） ひきこもり状態にある方の最終学歴



最も高かったのは「高等学校」であり、111件で31.0%であった。続いて高かったのは「大学・大学院」であり、104件で29.1%であった。続いて、「中学校」が47件で13.1%、「専修学校・専門学校」が46件で12.8%であった。

B群において、最も高かったのは「大学・大学院」であり、83件で23.2%であった。続いて高かったのは「高等学校」であり、76件で21.2%であった。続いて、「中学校」が40件で11.2%、「専修学校・専門学校」が38件で10.6%であった。E群は「高等学校」が最も高く、6件で1.7%であった。F群も「高等学校」が最も高く、29件で8.1%であった。

〈結果〉

ひきこもり状態にある方の最終学歴は高等学校や大学・大学院が多いことが示された。全体と、B群の「高等学校」「大学・大学院」の順位が異なるのは、E群とF群の「高等学校」の件数が高いことによるものであると考えられる。

※A群：ひきこもりがない世帯 B群：広義のひきこもり C群：準ひきこもり D群：狭義のひきこもり

E群：6か月末満の広義のひきこもり F群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

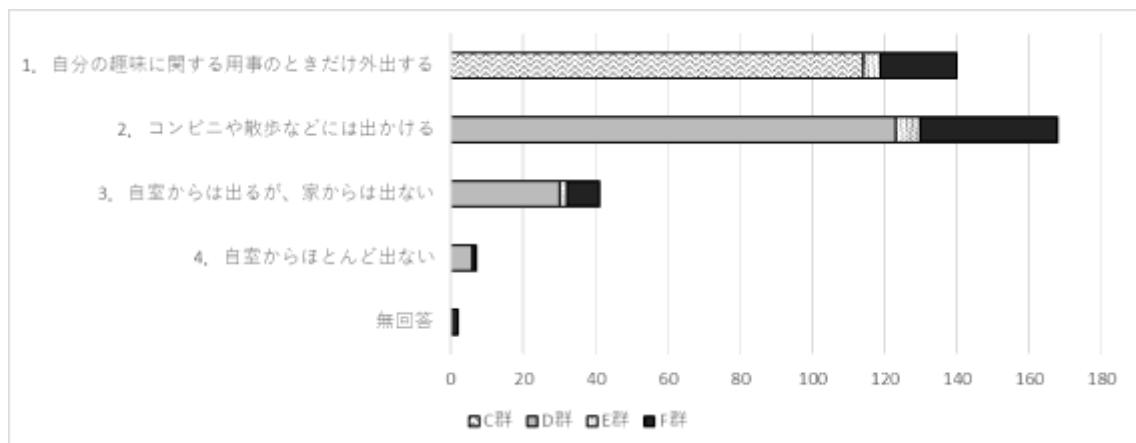
【ひきこもり状態にある方の外出状況】

問7「その方は普段どのくらい外出しますか。現在の状態についてお答えください。(1つだけ回答)」という質問の結果から、ひきこもり状態にある方の外出状況は以下のとおりであった (Table 7)。

Table 7 (表) ひきこもり状態にある方の外出状況

区分	全体	B		C		D		E		F		
		C群	D群	C群	D群	C群	D群	C群	D群	C群	D群	
1. 自分の趣味に関する用事のときだけ外出する	140	39.1%	114	31.8%	114	31.8%	0	0.0%	5	1.4%	21	5.9%
2. コンビニや散歩などには出かける	168	46.9%	123	34.4%	0	0.0%	123	34.4%	7	2.0%	38	10.6%
3. 自室からは出るが、家からは出ない	41	11.5%	30	8.4%	0	0.0%	30	8.4%	2	0.6%	9	2.5%
4. 自室からほとんど出ない	7	2.0%	6	1.7%	0	0.0%	6	1.7%	0	0.0%	1	0.3%
無回答	2	0.6%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	0.6%
合計	358	100.0%	273	76.3%	114	31.8%	159	44.4%	14	3.9%	71	19.8%

Table 7 (グラフ) ひきこもり状態にある方の外出状況



最も多かったのは「普段は家にいるが、コンビニや散歩などには出かける」であり、168件で46.9%であった。続いて高かったのは「普段は家にいるが、自分の趣味に関する用事のときだけ外出する」であり、140件で39.1%であった。続いて、「自室からは出るが、家からは出ない」が41件で11.5%、「自室からほとんど出ない」が7件で2.0%であった。

B群において、最も多かったのは「普段は家にいるが、コンビニや散歩などには出かける」であり、123件で34.4%であった。続いて高かったのは「普段は家にいるが、自分の趣味に関する用事のときだけ外出する」であり、114件で31.8%であった。続いて、「自室からは出るが、家からは出ない」が30件で8.4%、「自室からほとんど出ない」が6件で1.7%であった。

〈結果〉

全体、B群ともに、多かったのは「普段は家にいるが、コンビニや散歩などには出かける」「普段は家にいるが、自分の趣味に関する用事のときだけ外出する」であり、全体のうち

86.0%、B群のうち 66.2%が外出していることが示された。一方で、「自室からは出るが、家からは出ない」「自室からほとんど出ない」のは、全体のうち 13.5%、B群のうち 10.1%であり、ひきこもり状態にある方のうち、約 10%は家から出ない状態にあることが示された。

※A群：ひきこもりがない世帯 B群：広義のひきこもり C群：準ひきこもり D群：狭義のひきこもり
E群：6か月未満の広義のひきこもり F群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

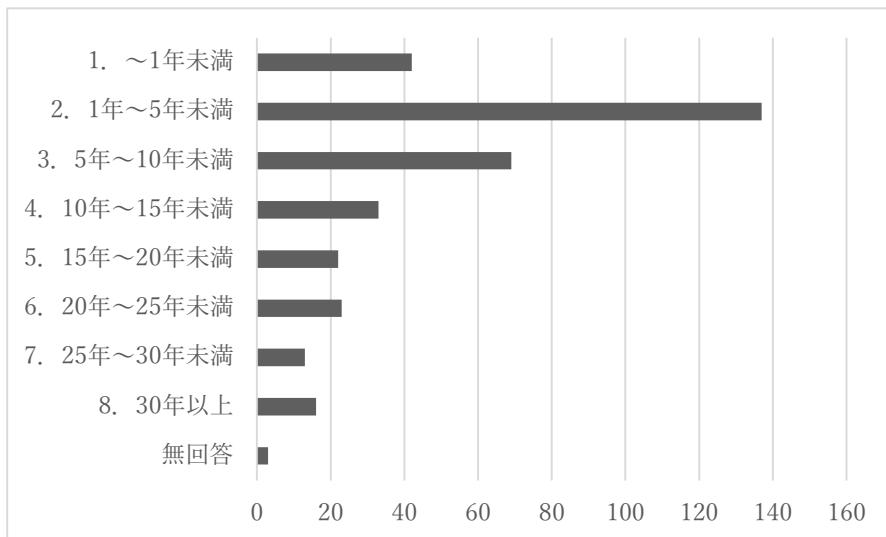
【ひきこもり状態の期間】

問8「その方が現在の状態となって、どのくらい経ちますか。(1つだけ回答)」という質問の結果から、ひきこもり状態の期間は以下のとおりであった (Table 8-1、8-2)。

Table 8-1 (表) ひきこもり状態の期間

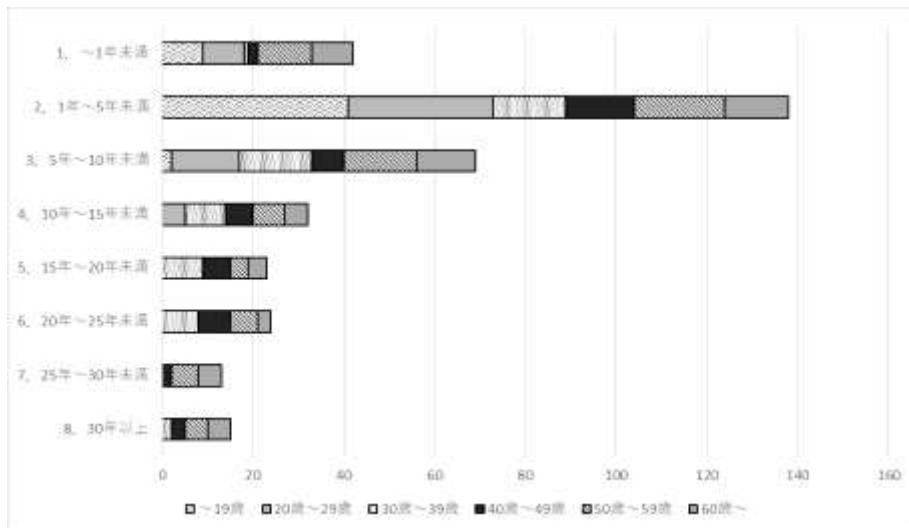
区分	対象数	%
1. ~1年未満	42	11.7%
2. 1年～5年未満	137	38.3%
3. 5年～10年未満	69	19.3%
4. 10年～15年未満	33	9.2%
5. 15年～20年未満	22	6.1%
6. 20年～25年未満	23	6.4%
7. 25年～30年未満	13	3.6%
8. 30年以上	16	4.5%
無回答	3	0.8%
合計	358	100.0%

Table 8-1 (グラフ) ひきこもり状態の期間



最も高かったのは「1年～5年未満」であり、137件で38.3%であった。続いて高かったのは「5～10年未満」であり、69件で19.3%であった。続いて「1年未満」が42件で11.7%、「10～15年未満」が33件で9.2%であった。

Table 8-2 (グラフ) ひきこもり状態の期間 (各年齢層)



各年齢層の全体における、ひきこもり状態の期間は Table8-2 のとおりである。「39歳以下」の年齢層において、最も高かったのは「1～5年未満」で89件、続いて「5～10年未満」が33件、「1年未満」が19件、「10～15年未満」が14件、「15～20年未満」が9件であった。「40歳以上」の年齢層において、最も高かったのは「1～5年未満」で49件、「5～10年未満」が36件、「1年未満」が23件、「10～15年未満」が18件であった。

〈結果〉

39歳以下の若年層、40歳以上の中高年層とともに「1～5年未満」の間ひきこもり状態が続いていることが最も多かった。また、中高年層の方が若年層よりもひきこもり状態の期間が長いことが示された。

※A群：ひきこもりがない世帯 B群：広義のひきこもり C群：準ひきこもり D群：狭義のひきこもり
E群：6か月未満の広義のひきこもり F群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

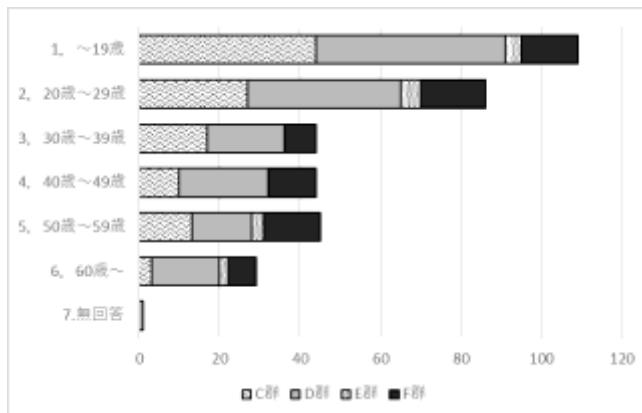
【ひきこもり状態になった時期】

問9「その方が現在の状態になったのは、何歳の頃ですか。(1つだけ回答)」という質問の結果から、ひきこもり状態になった時期は以下のとおりであった (Table 9)。

Table 9 (表) ひきこもり状態になった時期

区分	全体	B		C		D		E		F		
1. ~19歳	109	30.4%	91	25.4%	44	12.3%	47	13.1%	4	1.1%	14	3.9%
2. 20歳~29歳	86	24.0%	65	18.2%	27	7.5%	38	10.6%	5	1.4%	16	4.5%
3. 30歳~39歳	44	12.3%	36	10.1%	17	4.7%	19	5.3%	0	0.0%	8	2.2%
4. 40歳~49歳	44	12.3%	32	8.9%	10	2.8%	22	6.1%	0	0.0%	12	3.4%
5. 50歳~59歳	45	12.6%	28	7.8%	13	3.6%	15	4.2%	3	0.8%	14	3.9%
6. 60歳~	29	8.1%	20	5.6%	3	0.8%	17	4.7%	2	0.6%	7	2.0%
無回答	1	0.3%	1	0.3%	0	0.0%	1	0.3%	0	0.0%	0	0.0%
合計	358	100.0%	273	76.3%	114	31.8%	159	44.4%	14	3.9%	71	19.8%

Table 9 (グラフ) ひきこもり状態になった時期



最も高かったのは「19歳以下」であり、109件で30.4%であった。続いて高かったのは「20~29歳」であり、86件で24.0%であった。続いて、「50~59歳」が45件で12.6%、「30~39歳」「40~49歳」が44件で12.3%、「60歳以上」が29件で8.1%であった。

B群において、最も高かったのは「19歳以下」であり、91件で25.4%であった。続いて高かったのは「20~29歳」であり、65件で18.2%であった。続いて、「30~39歳」が36件で10.1%、「40~49歳」が32件で8.9%、「50~59歳」が28件で7.8%であった。

〈結果〉

ひきこもり状態になった時期は若年層に多く、年齢が上がるにつれて少なくなる傾向にあることが示された。

※A群：ひきこもりがない世帯 B群：広義のひきこもり C群：準ひきこもり D群：狭義のひきこもり

E群：6か月未満の広義のひきこもり F群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

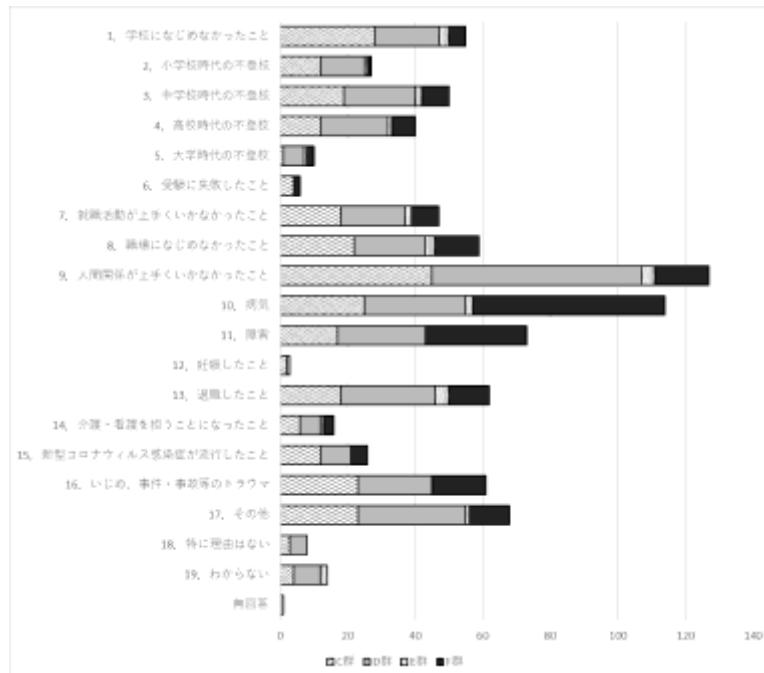
【ひきこもり状態になったきっかけ】

問 10「その方が現在の状態になった主な理由は何ですか。(複数回答可)」という質問の結果から、ひきこもり状態になったきっかけは以下のとおりであった (Table 10-1、10-2、10-3、10-4)。

Table 10-1 (表) ひきこもり状態になったきっかけ

区分	全体	B		C		D		E		F	
1. 学校になじめなかったこと	55 6.3%	47 5.4%	28 3.2%	19 2.2%	3 0.3%	5 0.6%					
2. 小学校時代の不登校	27 3.1%	25 2.9%	12 1.4%	13 1.5%	1 0.1%	1 0.1%					
3. 中学校時代の不登校	50 5.8%	40 4.6%	19 2.2%	21 2.4%	2 0.2%	8 0.9%					
4. 高校時代の不登校	40 4.6%	32 3.7%	12 1.4%	20 2.3%	1 0.1%	7 0.8%					
5. 大学時代の不登校	10 1.2%	7 0.8%	1 0.1%	6 0.7%	1 0.1%	2 0.2%					
6. 受験に失敗したこと	6 0.7%	4 0.5%	4 0.5%	0 0.0%	0 0.0%	2 0.2%					
7. 就職活動が上手くいかなかったこと	47 5.4%	37 4.3%	18 2.1%	19 2.2%	2 0.2%	8 0.9%					
8. 職場になじめなかったこと	59 6.8%	43 5.0%	22 2.5%	21 2.4%	3 0.3%	13 1.5%					
9. 人間関係が上手くいかなかったこと	127 14.6%	107 12.3%	45 5.2%	62 7.2%	4 0.5%	16 1.8%					
10. 病気	114 13.1%	55 6.3%	25 2.9%	30 3.5%	2 0.2%	57 6.6%					
11. 障害	73 8.4%	43 5.0%	17 2.0%	26 3.0%	0 0.0%	30 3.5%					
12. 妊娠したこと	3 0.3%	3 0.3%	2 0.2%	1 0.1%	0 0.0%	0 0.0%					
13. 退職したこと	62 7.2%	46 5.3%	18 2.1%	28 3.2%	4 0.5%	12 1.4%					
14. 介護・看護を担うことになったこと	16 1.8%	12 1.4%	6 0.7%	6 0.7%	1 0.1%	3 0.3%					
15. 新型コロナウィルス感染症が流行したこと	26 3.0%	21 2.4%	12 1.4%	9 1.0%	0 0.0%	5 0.6%					
16. いじめ、事件・事故等のトラウマ	61 7.0%	45 5.2%	23 2.7%	22 2.5%	0 0.0%	16 1.8%					
17. その他	68 7.8%	55 6.3%	23 2.7%	32 3.7%	1 0.1%	12 1.4%					
18. 特に理由はない	8 0.9%	8 0.9%	3 0.3%	5 0.6%	0 0.0%	0 0.0%					
19. わからない	14 1.6%	12 1.4%	4 0.5%	8 0.9%	2 0.2%	0 0.0%					
無回答	1 0.1%	1 0.1%	0 0.0%	1 0.1%	0 0.0%	0 0.0%					
合計	867 100.0%	643 74.2%	294 33.9%	349 40.3%	27 3.1%	197 22.7%					

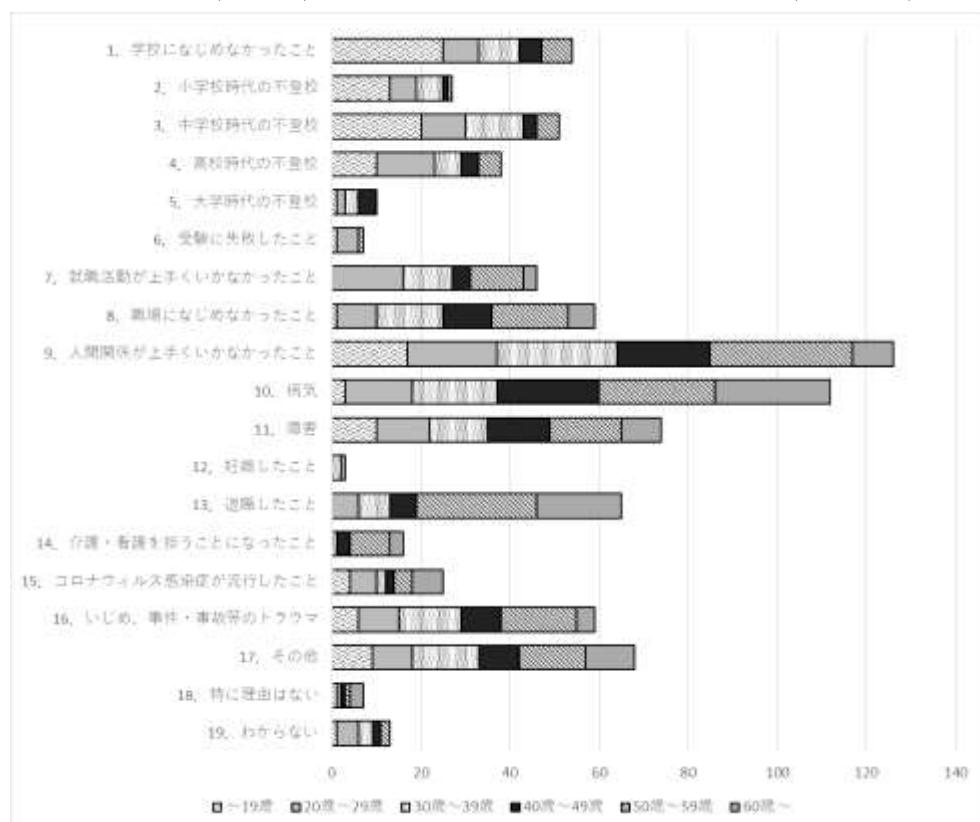
Table 10-1 (グラフ) ひきこもり状態になったきっかけ



最も高かったのは「人間関係が上手くいかなかったこと」であり、127件で14.6%であった。続いて、「病気」が114件で13.1%、「障害」が73件で8.4%、「その他」が68件で7.8%、「退職したこと」が62件で7.2%、「いじめ、事件・事故等のトラウマ」が61件で7.0%、「職場になじめなかつたこと」が59件で6.8%、「学校になじめなかつたこと」が55件で6.3%、「中学時代の不登校」が50件で5.8%、「就職活動が上手くいかなかつたこと」が47件で5.4%、「高校時代の不登校」が40件で4.6%であった。

B群において、最も高かったのは「人間関係が上手くいかなかつたこと」であり、107件で12.3%であった。続いて、「病気」「その他」が55件で6.3%、「学校になじめなかつたこと」が47件で5.4%、「退職したこと」が46件で5.3%、「いじめ、事件・事故等のトラウマ」が45件で5.2%、「職場になじめなかつたこと」「障害」が43件で5.0%、「中学校時代の不登校」が40件で4.6%、「就職活動が上手くいかなかつたこと」が37件で4.3%、「高校時代の不登校」が32件で3.7%、「小学校時代の不登校」が25件で2.9%、「新型コロナウィルス感染症が流行したこと」が21件で2.4%であった。

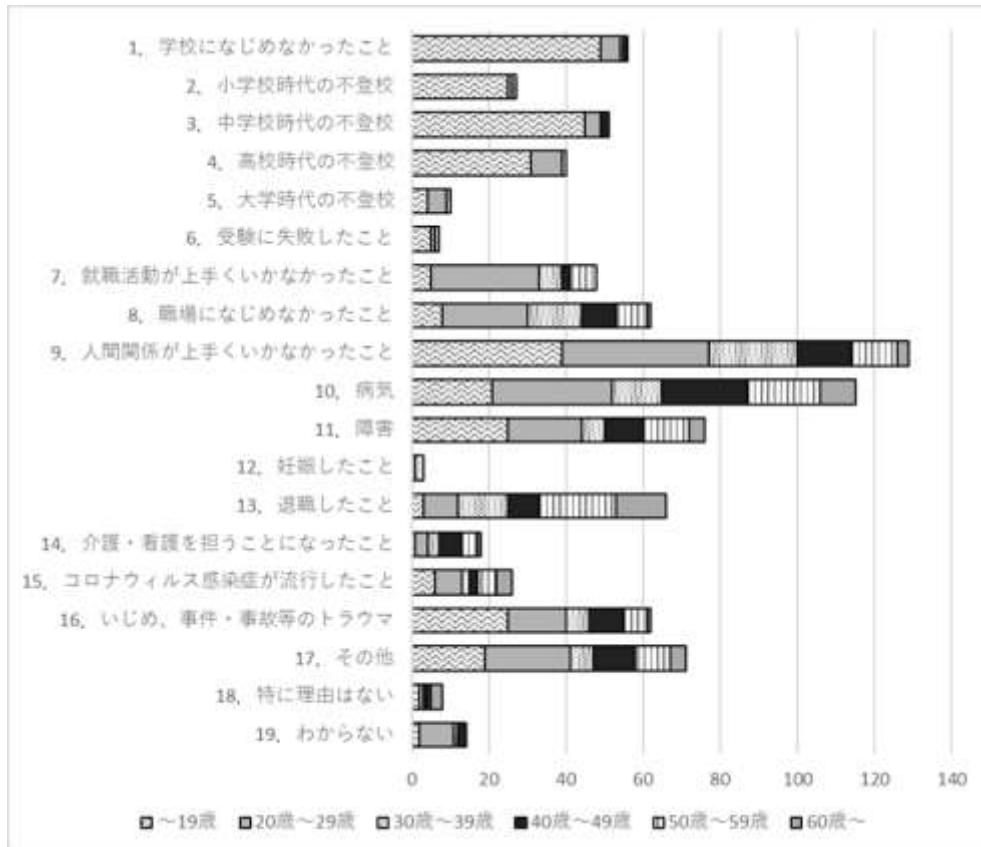
Table 10-2 (グラフ) ひきこもり状態になったきっかけ (各年齢層)



各年齢層の全体における、ひきこもり状態になったきっかけは Table10-2 のとおりである。「39歳以下」の年齢層において、最も高かったのは「人間関係が上手くいかなかつたこと」であった。

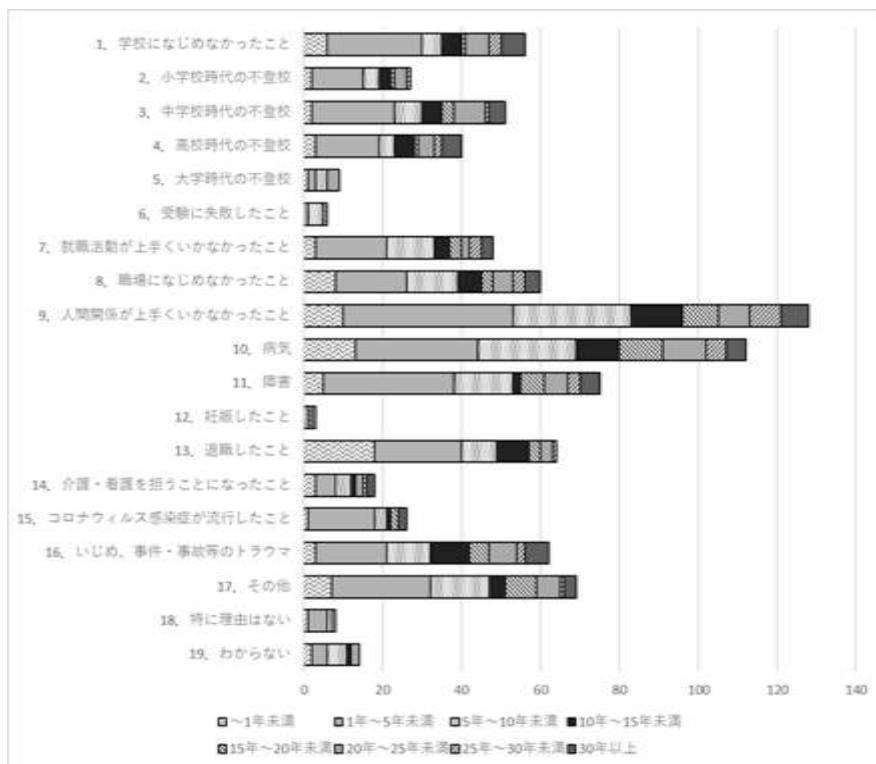
と」で 64 件、続いて「中学校時代の不登校」が 43 件、「学校になじめなかつたこと」が 42 件、「病気」が 37 件、「障害」が 35 件であった。「40 歳以上」の年齢層において、最も高かったのは「病気」で 75 件、「人間関係が上手くいかなかつたこと」が 62 件、「退職したこと」が 52 件、「障害」が 39 件であった。

Table 10-3 (グラフ) ひきこもり状態になったきっかけ
(ひきこもり状態になった時期)



全体のひきこもり状態になった各時期におけるひきこもり状態になったきっかけは Table10-3 のとおりである。「39 歳以下」からひきこもり状態になった方々において、最も高かったのは「人間関係が上手くいかなかつたこと」で 100 件、続いて「病気」が 65 件、「学校になじめなかつたこと」が 55 件、「障害」が 50 件、「中学校時代の不登校」が 49 件であった。「40 歳以上」からひきこもり状態になった方々において、最も高かったのは「病気」で 50 件、続いて「退職したこと」が 41 件、「人間関係が上手くいかなかつたこと」が 29 件、「障害」が 26 件であった。

Table 10-4 (グラフ) ひきこもり状態になったきっかけ (各ひきこもり期間)



各ひきこもり期間の全体における、ひきこもり状態になったきっかけは Table10-4 のとおりである。「10 年未満」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「人間関係が上手くいかなかっこと」で 83 件、続いて「病気」が 69 件、「障害」が 53 件、「退職したこと」が 49 件、「その他」が 47 件であった。「10 年以上」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「人間関係が上手くいかなかっこと」で 45 件、続いて「病気」が 43 件、「いじめ、事件・事故等のトラウマ」が 30 件、「障害」「その他」が 22 件であった。

〈結果〉

全体的に人間関係が上手くいかなかっことが最も多いきっかけであり、「40 歳以上」の年齢層でひきこもり状態になった方は病気をきっかけにひきこもり状態になることが最も多いことが示された。また、「10 年未満」ひきこもり状態にある方々のきっかけとして、障害、学校や職場での不適応、退職や不登校であった経緯、いじめや事件・事故等のトラウマが多いと考えられる。さらに、「10 年以上」ひきこもり状態にある方々のきっかけは、いじめや事件・事故等のトラウマが多い傾向にあると考えられる。

※A 群：ひきこもりがない世帯 B 群：広義のひきこもり C 群：準ひきこもり D 群：狭義のひきこもり

E 群：6 か月未満の広義のひきこもり F 群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

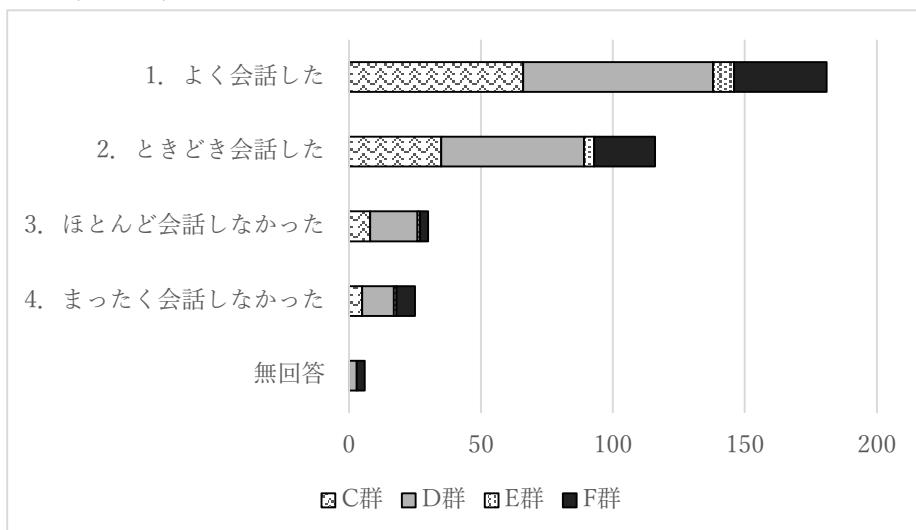
【過去6か月間におけるひきこもり状態にある方と家族の会話頻度】

問11「最近6か月間に、その方はご家族と会話をしましたか。(1つだけ回答)」という質問の結果から、過去6か月間におけるひきこもり状態にある方と家族の会話頻度は以下のとおりであった(Table 11-1, 11-2, 11-3)。

Table 11-1 (表) 過去6か月間におけるひきこもり状態にある方と家族の会話頻度

区分	全体		B		C		D		E		F	
1. よく会話した	181	50.6%	138	38.5%	66	18.4%	72	20.1%	8	2.2%	35	9.8%
2. ときどき会話した	116	32.4%	89	24.9%	35	9.8%	54	15.1%	4	1.1%	23	6.4%
3. ほとんど会話しなかった	30	8.4%	26	7.3%	8	2.2%	18	5.0%	1	0.3%	3	0.8%
4. まったく会話しなかった	25	7.0%	17	4.7%	5	1.4%	12	3.4%	1	0.3%	7	2.0%
無回答	6	1.7%	3	0.8%	0	0.0%	3	0.8%	0	0.0%	3	0.8%
合計	358	100.0%	273	76.3%	114	31.8%	159	44.4%	14	3.9%	71	19.8%

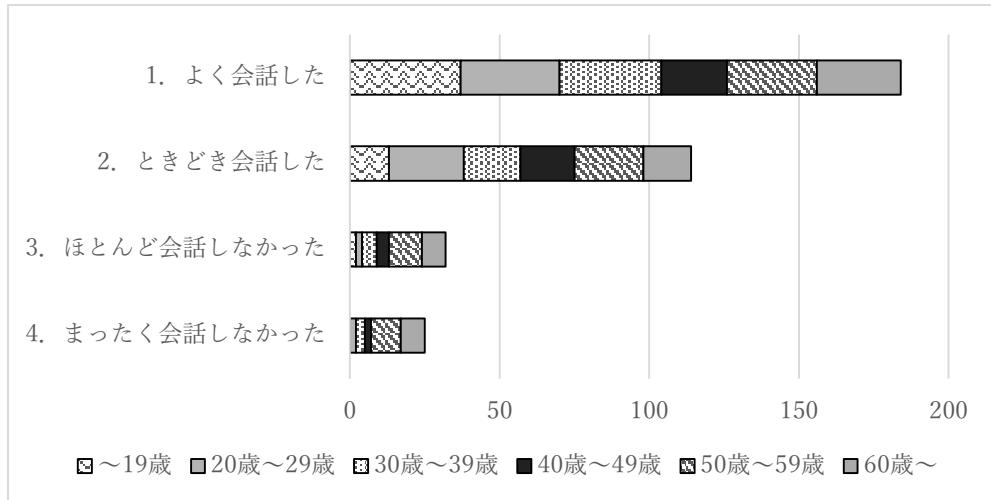
Table 11-1 (グラフ) 過去6か月間におけるひきこもり状態にある方と家族の会話頻度



最も高かったのは「よく会話した」であり、181件で50.6%であった。続いて、「ときどき会話した」が116件で32.4%、「ほとんど会話しなかった」が30件で8.4%、「まったく会話しなかった」が25件で7.0%であった。

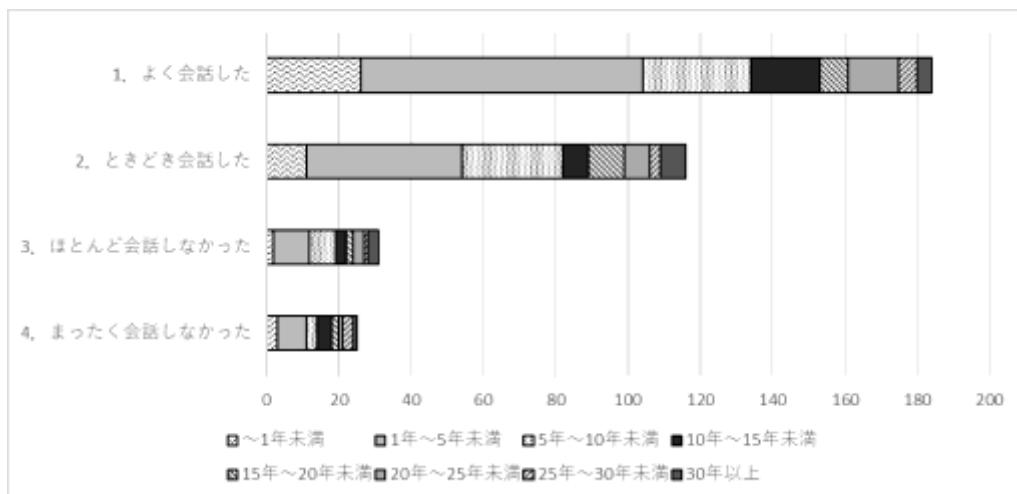
B群において、最も高かったのは「よく会話した」であり、138件で38.5%であった。続いて、「ときどき会話した」が89件で24.9%、「ほとんど会話しなかった」が26件で7.3%、「まったく会話しなかった」が17件で4.7%であった。

Table 11-2 (グラフ) 過去6か月間におけるひきこもり状態にある方と家族の会話頻度（各年齢層）



各年齢層の全体における、過去6か月間におけるひきこもり状態にある方と家族の会話頻度はTable11-2のとおりである。「39歳以下」の年齢層において、最も高かったのは「よく会話した」であり、104件であった。続いて、「ときどき会話した」が57件、「ほとんど会話しなかった」が9件、「まったく会話しなかった」が5件であった。「40歳以上」の年齢層において、最も高かったのは「よく会話した」であり、80件であった。続いて、「ときどき会話した」が57件、「ほとんど会話しなかった」が23件、「まったく会話しなかった」が20件であった。

Table 11-3 (グラフ) 過去6か月間におけるひきこもり状態にある方と家族の会話頻度（各ひきこもり期間）



各ひきこもり期間の全体における、過去6か月間におけるひきこもり状態にある方と家族の会話頻度はTable11-3のとおりである。「10年未満」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「よく会話した」であり、134件であった。続いて、「ときどき会話した」が82件、「ほとんど会話しなかった」が19件、「まったく会話しなかった」が14件であった。「10年以上」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「よく会話した」であり、50件であった。続いて、「ときどき会話した」が34件、「ほとんど会話しなかった」が12件、「まったく会話しなかった」が11件であった。

〈結果〉

全体、B群とともに、多かったのは「よく会話した」「ときどき会話した」であり、全体のうち83.0%、B群のうち63.4%が家族と会話していることが示された。一方で、「ほとんど会話しなかった」「まったく会話しなかった」のは、全体のうち15.4%、B群のうち12.0%であり、家族と会話していない人よりも会話している人の方が多いことが示された。年齢層やひきこもり期間による区分でも概ね違いはみられなかった。

※A群：ひきこもりがない世帯 B群：広義のひきこもり C群：準ひきこもり D群：狭義のひきこもり
E群：6か月未満の広義のひきこもり F群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

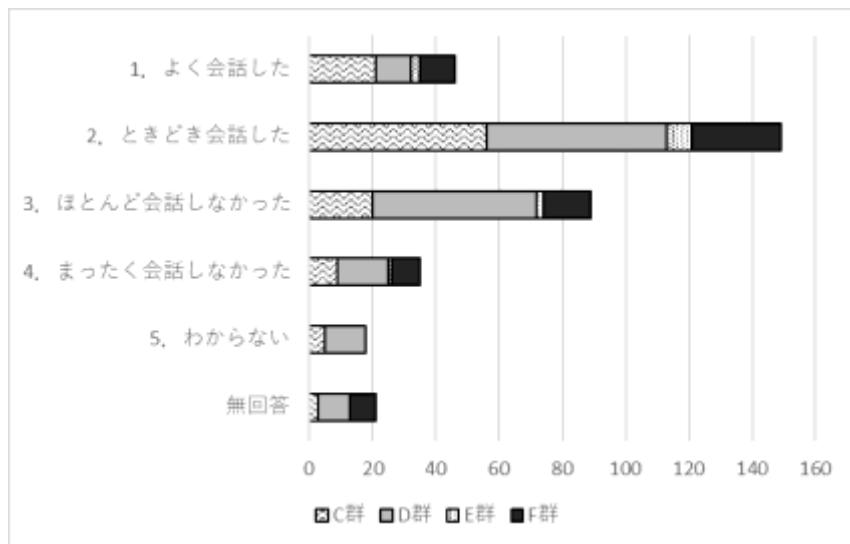
【過去6か月間におけるひきこもり状態にある方と家族以外の人の会話頻度】

問12「最近6か月間に、その方はご家族以外の人と会話をしましたか。(1つだけ回答)」という質問の結果から、過去6か月間におけるひきこもり状態にある方と家族以外の人の会話頻度は以下のとおりであった (Table 12-1, 12-2, 12-3)。

Table 12-1 (表) 過去6か月間におけるひきこもり状態にある方と
家族以外の人の会話頻度

区分	全体	B		C	D	E		F	
1. よく会話した	46 12.8%	32 8.9%	21 5.9%	11 3.1%	3 0.8%	11 3.1%			
2. ときどき会話した	149 41.6%	113 31.6%	56 15.6%	57 15.9%	8 2.2%	28 7.8%			
3. ほとんど会話しなかった	89 24.9%	72 20.1%	20 5.6%	52 14.5%	2 0.6%	15 4.2%			
4. まったく会話しなかった	35 9.8%	25 7.0%	9 2.5%	16 4.5%	1 0.3%	9 2.5%			
5. わからない	18 5.0%	18 5.0%	5 1.4%	13 3.6%	0 0.0%	0 0.0%			
無回答	21 5.9%	13 3.6%	3 0.8%	10 2.8%	0 0.0%	8 2.2%			
合計	358 100.0%	273 76.3%	114 31.8%	159 44.4%	14 3.9%	71 19.8%			

Table 12-1 (グラフ) 過去6か月間におけるひきこもり状態にある方と
家族以外の人の会話頻度

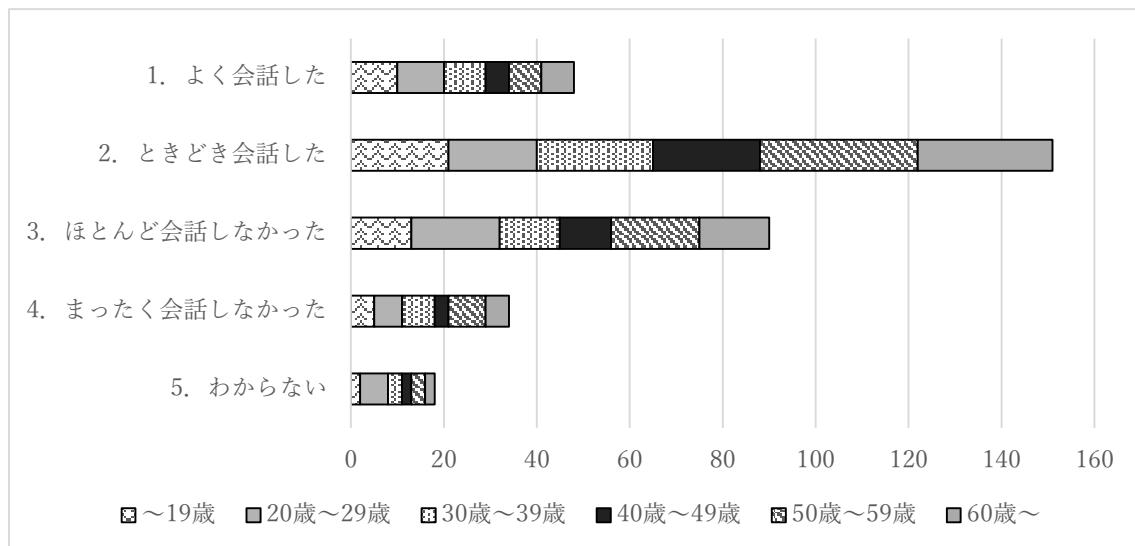


最も高かったのは「ときどき話した」であり、149件で41.6%であった。続いて、「ほとんど会話しなかった」が89件で24.9%、「よく会話した」が46件で12.8%、「まったく会話しなかった」が35件で9.8%、「わからない」が18件で5.0%であった。

B群において、最も高かったのは「ときどき話した」であり、113件で31.6%であった。続いて、「ほとんど会話しなかった」が72件で20.1%、「よく会話した」が32件で8.9%、「まったく会話しなかった」が25件で7.0%、「わからない」が18件で5.0%であった。C群とD群を比較したところ、C群の「よく会話した」が21件で5.9%なのに対して、D群

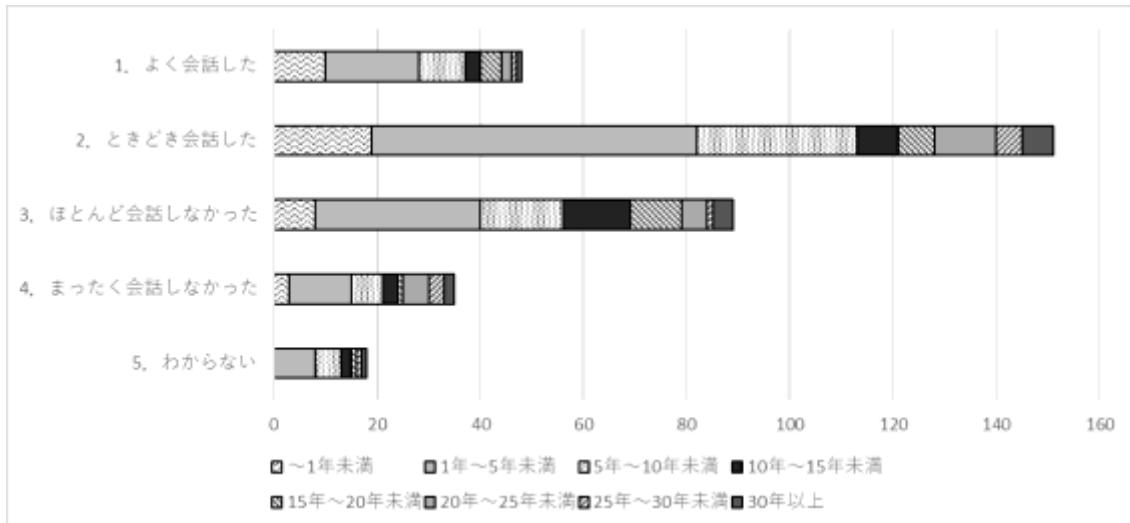
の「よく会話した」が11件で3.1%であった。また、C群の「ほとんど会話しなかった」が20件で5.6%、「まったく会話しなかった」が9件で2.5%なのに対して、D群の「ほとんど会話しなかった」が52件で14.5%、「まったく会話しなかった」が16件で4.5%であった。

Table 12-2 (グラフ) 過去6か月間におけるひきこもり状態にある方と
家族以外の人の会話頻度（各年齢層）



各年齢層の全体における、過去6か月間におけるひきこもり状態にある方と家族以外の人の会話頻度はTable12-2のとおりである。「39歳以下」の年齢層において、最も高かったのは「ときどき会話した」であり、65件であった。続いて、「ほとんど会話しなかった」が45件、「よく会話した」が29件、「まったく会話しなかった」が18件であった。「40歳以上」の年齢層において、最も高かったのは「ときどき会話した」であり、86件であった。続いて、「ほとんど会話しなかった」が45件、「よく会話した」が19件、「まったく会話しなかった」が16件であった。

Table 12-3 (グラフ) 過去6か月間におけるひきこもり状態にある方と
家族以外の人の会話頻度（各ひきこもり期間）



各ひきこもり期間の全体における、過去6か月間におけるひきこもり状態にある方と家族以外の人の会話頻度は Table12-3 のとおりである。「10 年未満」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「ときどき会話した」であり、113 件であった。続いて、「ほとんど会話しなかった」が 56 件、「よく会話した」が 37 件、「まったく会話しなかった」が 21 件であった。「10 年以上」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「ときどき会話した」であり、38 件であった。続いて、「ほとんど会話しなかった」が 33 件、「まったく会話しなかった」が 14 件、「よく会話した」が 11 件であった。

〈結果〉

全体、B 群ともに、「ときどき会話した」が最も高かった。「よく会話した」「ときどき会話した」は全体のうち 54.4%、B 群のうち 40.5%が家族以外の人と会話していることが示された。一方で、「ほとんど会話しなかった」「まったく会話しなかった」のは、全体のうち 34.7%、B 群のうち 27.1%であり、家族以外の人と会話していない人よりも会話している人の方が多いことが示された。C 群と D 群の比較から、C 群は D 群よりも家族以外の人と会話することが多く、D 群は C 群よりも家族以外の人と会話することが少ない傾向にあることが示された。また、年齢層による比較では概ね違いはみられなかったものの、ひきこもり期間による比較では「10 年以上」の方々における「よく会話した」の順位が低くなっていたことから、ひきこもり期間が長くなると家族以外の人との会話頻度が減少することが示された。

※A 群：ひきこもりがない世帯 B 群：広義のひきこもり C 群：準ひきこもり D 群：狭義のひきこもり

E 群：6か月未満の広義のひきこもり F 群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

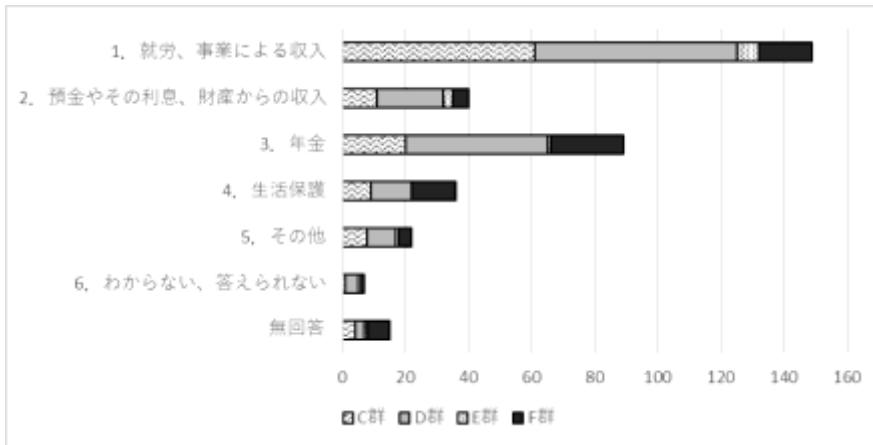
【ひきこもり状態にある方の生計を支えている主な収入源】

問13「その方の属する世帯の生計を支えている方の主な収入源は何ですか。(1つだけ回答)」という質問の結果から、ひきこもり状態にある方の生計を支えている主な収入源は以下のとおりであった (Table 13-1、13-2)。

Table 13-1 (表) ひきこもり状態にある方の生計を支えている主な収入源

区分	全体		B		C		D		E		F	
1. 就労、事業による収入	149	41.6%	125	34.9%	61	17.0%	64	17.9%	7	2.0%	17	4.7%
2. 預金やその利息、財産からの収入	40	11.2%	32	8.9%	11	3.1%	21	5.9%	3	0.8%	5	1.4%
3. 年金	89	24.9%	65	18.2%	20	5.6%	45	12.6%	1	0.3%	23	6.4%
4. 生活保護	36	10.1%	22	6.1%	9	2.5%	13	3.6%	0	0.0%	14	3.9%
5. その他	22	6.1%	17	4.7%	8	2.2%	9	2.5%	1	0.3%	4	1.1%
6. わからない、答えられない	7	2.0%	5	1.4%	1	0.3%	4	1.1%	1	0.3%	1	0.3%
無回答	15	4.2%	7	2.0%	4	1.1%	3	0.8%	1	0.3%	7	2.0%
合計	358	100.0%	273	76.3%	114	31.8%	159	44.4%	14	3.9%	71	19.8%

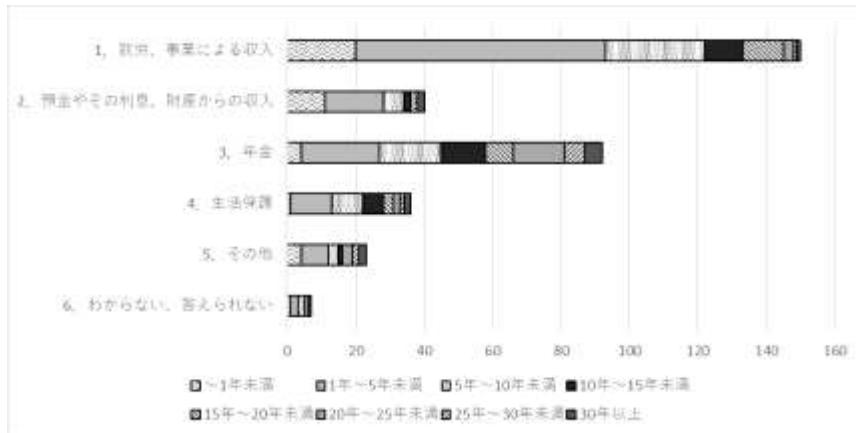
Table 13-1 (グラフ) ひきこもり状態にある方の生計を支えている主な収入源



最も高かったものは「就労、事業による収入（農業収入を含む）」であり、149件で41.6%であった。続いて高かったのは「年金」であり、89件で24.9%であった。続いて「預金やその利息、財産からの収入（株の配当や不動産賃料など）」が40件で11.2%、「生活保護」が36件で10.1%、「その他」が22件で6.1%であった。

B群において、最も高かったものは「就労、事業による収入（農業収入を含む）」であり、125件で34.9%であった。続いて高かったのは「年金」であり、65件で18.2%であった。続いて「預金やその利息、財産からの収入（株の配当や不動産賃料など）」が32件で8.9%、「生活保護」が22件で6.1%、「その他」が17件で4.7%であった。

Table 13-2 (グラフ) ひきこもり状態にある方の生計を支えている主な収入源
(各ひきこもり期間)



各ひきこもり期間の全体における、ひきこもり状態にある方の生計を支えている主な収入源は Table13-2 のとおりである。「10年未満」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「就労、事業による収入（農業収入を含む）」であり、122件であった。続いて、「年金」が45件、「預金やその利息、財産からの収入（株の配当や不動産賃料など）」が34件、「生活保護」が22件であった。「10年以上」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「年金」であり、47件であった。続いて、「就労、事業による収入（農業収入を含む）」が28件、「生活保護」が14件、「その他」が8件であった。

〈結果〉

全体、B群とともに、主に就労や事業による収入で生活していることが多く、続いて年金、預金やその利息、財産からの収入、生活保護で生活していることが示された。ひきこもり期間による比較では、ひきこもり期間が長くなるにつれて、就労や事業による収入で生活する方が減り、年金で生活する方が増えることが示された。

※A群：ひきこもりがない世帯 B群：広義のひきこもり C群：準ひきこもり D群：狭義のひきこもり
E群：6か月未満の広義のひきこもり F群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

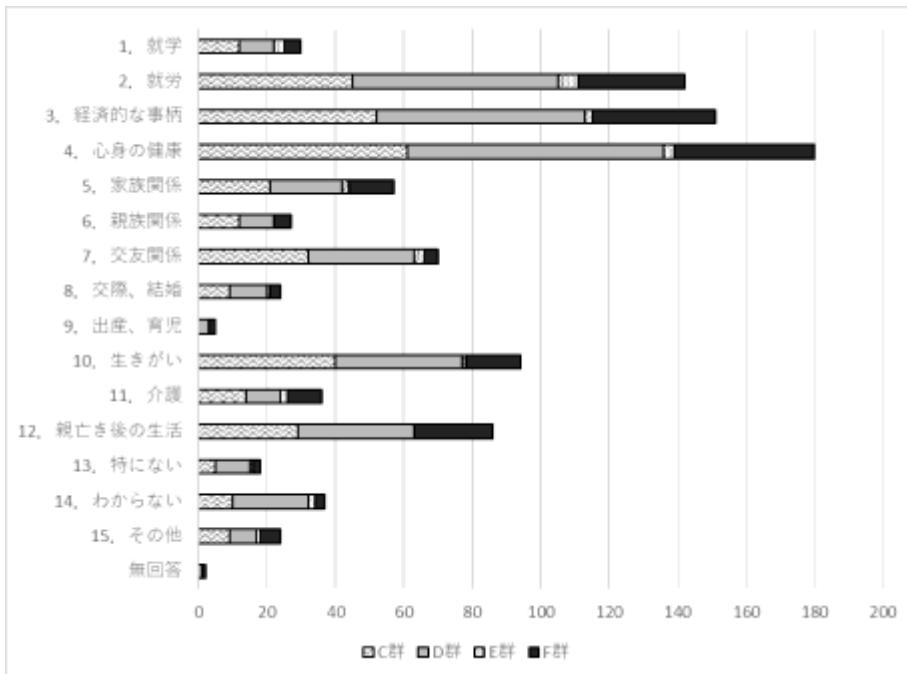
【ひきこもり状態にある方が心配していること】

問14「その方が心配していることは何だと思いますか。(複数回答可)」という質問の結果から、ひきこもり状態にある方が心配していることは以下のとおりであった (Table 14-1、14-2、14-3)。

Table14-1 (表) ひきこもり状態にある方が心配していること

区分	全体		B		C		D		E		F	
1. 就学	30	3.1%	22	2.2%	12	1.2%	10	1.0%	3	0.3%	5	0.5%
2. 就労	142	14.4%	105	10.7%	45	4.6%	60	6.1%	6	0.6%	31	3.2%
3. 経済的な事柄	151	15.4%	113	11.5%	52	5.3%	61	6.2%	2	0.2%	36	3.7%
4. 心身の健康	180	18.3%	136	13.8%	61	6.2%	75	7.6%	3	0.3%	41	4.2%
5. 家族関係	57	5.8%	42	4.3%	21	2.1%	21	2.1%	2	0.2%	13	1.3%
6. 親族関係	27	2.7%	22	2.2%	12	1.2%	10	1.0%	0	0.0%	5	0.5%
7. 交友関係	70	7.1%	63	6.4%	32	3.3%	31	3.2%	3	0.3%	4	0.4%
8. 交際、結婚	24	2.4%	20	2.0%	9	0.9%	11	1.1%	1	0.1%	3	0.3%
9. 出産、育児	5	0.5%	3	0.3%	0	0.0%	3	0.3%	0	0.0%	2	0.2%
10. 生きがい	94	9.6%	77	7.8%	40	4.1%	37	3.8%	1	0.1%	16	1.6%
11. 介護	36	3.7%	24	2.4%	14	1.4%	10	1.0%	2	0.2%	10	1.0%
12. 親亡き後の生活	86	8.7%	63	6.4%	29	3.0%	34	3.5%	0	0.0%	23	2.3%
13. 特にない	18	1.8%	15	1.5%	5	0.5%	10	1.0%	1	0.1%	2	0.2%
14. わからない	37	3.8%	32	3.3%	10	1.0%	22	2.2%	2	0.2%	3	0.3%
15. その他	24	2.4%	17	1.7%	9	0.9%	8	0.8%	1	0.1%	6	0.6%
無回答	2	0.2%	1	0.1%	0	0.0%	1	0.1%	0	0.0%	1	0.1%
合計	983	100.0%	755	76.8%	351	35.7%	404	41.1%	27	2.7%	201	20.4%

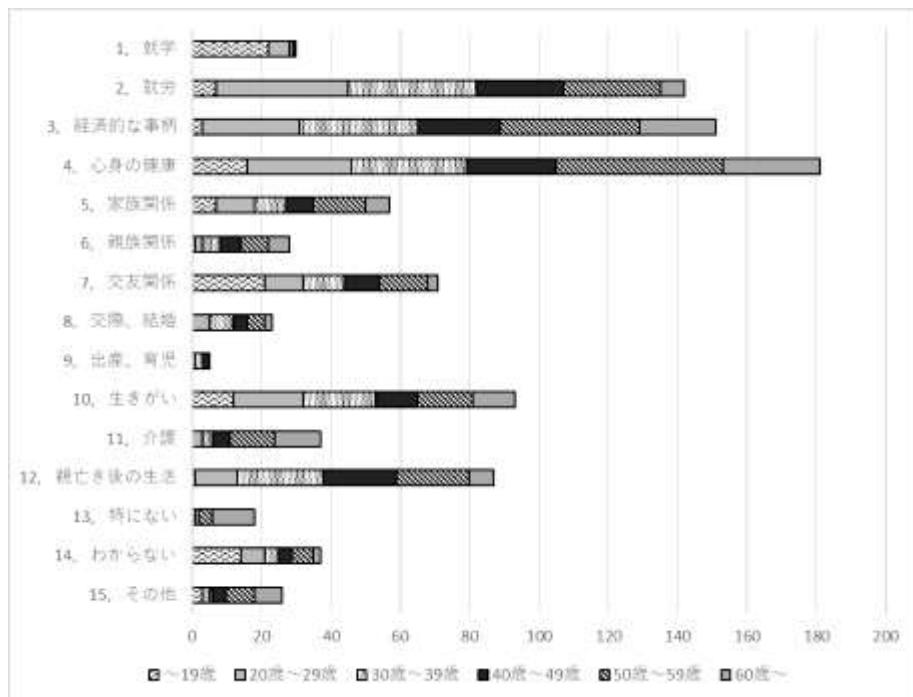
Table14-1 (グラフ) ひきこもり状態にある方が心配していること



最も高かったのは「心身の健康」であり、180件で18.3%であった。続いて、「経済的な事柄」が151件で15.4%、「就労」が142件で14.4%、「生きがい」が94件で9.6%、「親亡き後の生活」が86件で8.7%、「交友関係」が70件で7.1%、「家族関係」が57件で5.8%であった。

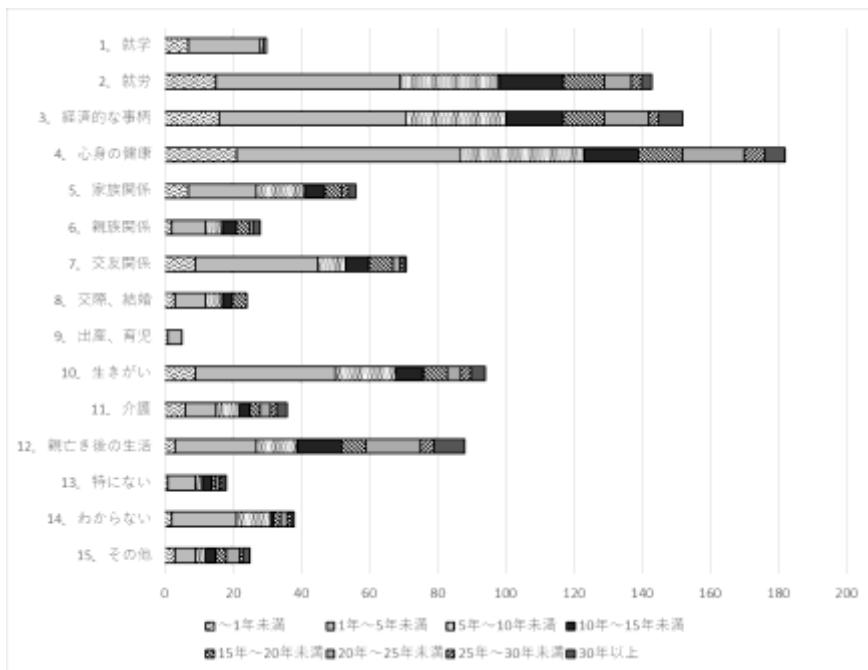
B群において、最も高かったのは「心身の健康」であり、136件で13.8%であった。続いて、「経済的な事柄」が113件で11.5%、「就労」が105件で10.7%、「生きがい」が77件で7.8%、「交友関係」「親亡き後の生活」が63件で6.4%、「家族関係」が42件で4.3%であった。

Table14-2 (グラフ) ひきこもり状態にある方が心配していること（各年齢層）



各年齢層の全体における、ひきこもり状態にある方が心配していることは Table14-2 のとおりである。「39歳以下」の年齢層において、最も高かったのは「就労」で82件、続いて「心身の健康」が79件、「経済的な事柄」が65件、「生きがい」が53件、「交友関係」が44件、「親亡き後の生活」が38件、「就学」が29件であった。「40歳以上」の年齢層において、最も高かったのは「心身の健康」で102件、続いて「経済的な事柄」が86件、「就労」が60件、「親亡き後の生活」で49件、「生きがい」が40件、「介護」が31件、「家族関係」が30件であった。

Table14-3 (グラフ) ひきこもり状態にある方が心配していること
(各ひきこもり期間)



各ひきこもり期間の全体における、ひきこもり状態にある方が心配していることはTable14-3のとおりである。「10年未満」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「心身の健康」で123件、続いて「経済的な事柄」が100件、「就労」が98件、「生きがい」が68件、「交友関係」が53件、「家族関係」が41件、「親亡き後の生活」が39件であった。「10年以上」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「心身の健康」で59件、続いて「経済的な事柄」が52件、「親亡き後の生活」が49件、「就労」が45件、「生きがい」が26件、「交友関係」が18件、「介護」が14件であった。

〈結果〉

全体、B群とともに、心身の健康を心配することが最も多く、就労や生きがい、経済面や親亡き後の生活、交友関係や家族関係を心配していることが示された。また、心身の健康や経済面、生きがいについての心配はどの年齢層、ひきこもり期間においても概ね同様にみられるが、若年層や10年未満のひきこもり状態にある方は就労の心配が強まりやすく、中高年や10年以上のひきこもり状態にある方は親亡き後の生活や介護の心配が強まりやすい傾向にあることが示され、年齢とともにライフイベントに合わせて心配事も変わっていく可能性が考えられる。

※A群：ひきこもりがない世帯 B群：広義のひきこもり C群：準ひきこもり D群：狭義のひきこもり

E群：6か月未満の広義のひきこもり F群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

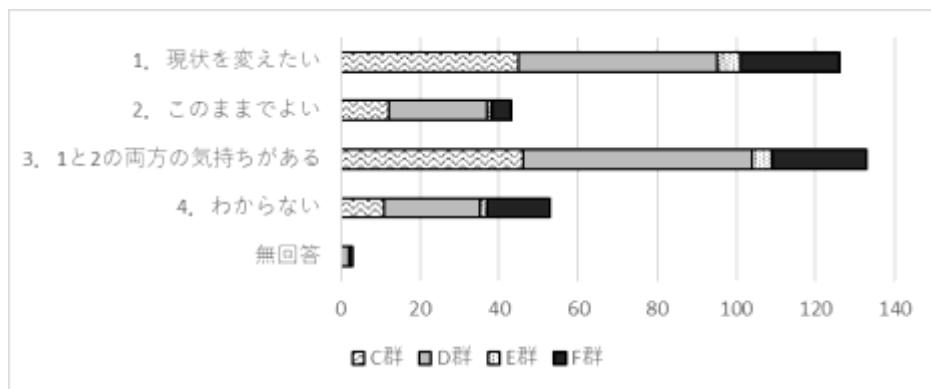
【ひきこもり状態にある方の現状への思い】

問 15「その方は現状をどのように考えていると思いますか。(1つだけ回答)」という質問の結果から、ひきこもり状態にある方の現状への思いは以下のとおりであった(Table 15-1、15-2、15-3)。

Table 15-1 (表) ひきこもり状態にある方の現状への思い

区分	全体		B		C		D		E		F	
1. 現状を変えたい	126	35.2%	95	26.5%	45	12.6%	50	14.0%	6	1.7%	25	7.0%
2. このままでよい	43	12.0%	37	10.3%	12	3.4%	25	7.0%	1	0.3%	5	1.4%
3. 1と2の両方の気持ちがある	133	37.2%	104	29.1%	46	12.8%	58	16.2%	5	1.4%	24	6.7%
4. わからない	53	14.8%	35	9.8%	11	3.1%	24	6.7%	2	0.6%	16	4.5%
無回答	3	0.8%	2	0.6%	0	0.0%	2	0.6%	0	0.0%	1	0.3%
合計	358	100.0%	273	76.3%	114	31.8%	159	44.4%	14	3.9%	71	19.8%

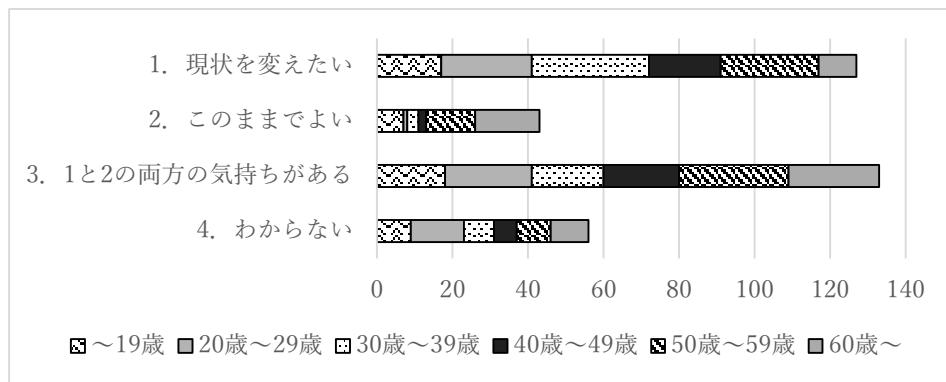
Table 15-1 (グラフ) ひきこもり状態にある方の現状への思い



最も高かったのは「現状を変えたい気持ちとこのままでよいという気持ちの両方がある」であり、133件で37.2%であった。続いて高かったのは「現状を変えたい」であり、126件で35.2%であった。続いて、「わからない」が53件で14.8%、「このままでよい」が43件で12.0%であった。

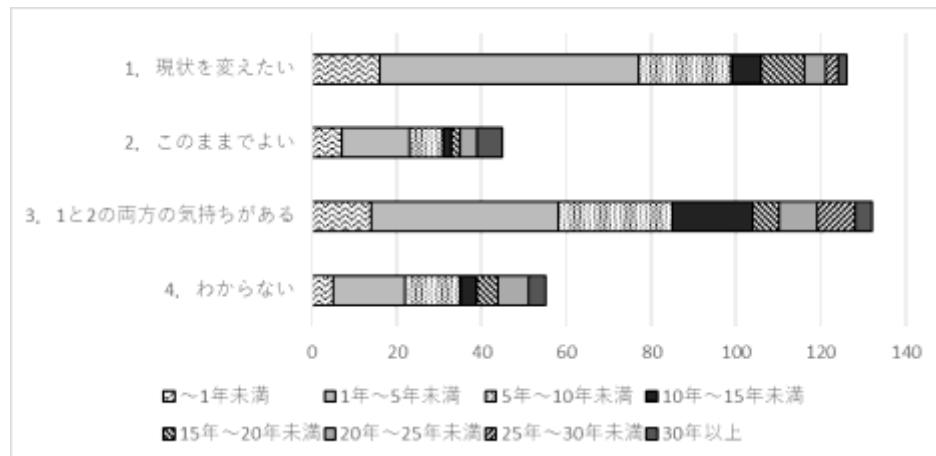
B群において、「現状を変えたい気持ちとこのままでよいという気持ちの両方がある」であり、104件で29.1%であった。続いて高かったのは「現状を変えたい」であり、95件で26.5%であった。続いて、「このままでよい」が37件で10.3%、「わからない」が35件で9.8%であった。

Table 15-2 (グラフ) ひきこもり状態にある方の現状への思い（各年齢層）



各年齢層の全体における、ひきこもり状態にある方の現状への思いは Table15-2 のとおりである。「39歳以下」の年齢層において、最も高かったのは「現状を変えたい」で 72 件、続いて「現状を変えたい気持ちとこのままでよいという気持ちの両方がある」が 60 件、「わからない」が 31 件、「このままでよい」が 11 件であった。「40歳以上」の年齢層において、最も高かったのは「現状を変えたい気持ちとこのままでよいという気持ちの両方がある」で 73 件、続いて「現状を変えたい」が 55 件、「このままでよい」が 32 件、「わからない」が 25 件であった。

Table 15-3 (グラフ) ひきこもり状態にある方の現状への思い（各ひきこもり期間）



各ひきこもり期間の全体における、ひきこもり状態にある方の現状への思いは Table15-3 のとおりである。「10年未満」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「現状を変えたい」で 99 件、続いて「現状を変えたい気持ちとこのままでよいという気持ちの両方がある」が 85 件、「わからない」が 35 件、「このままでよい」が 31 件であった。「10年以上」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「現状を変えたい気持ちとこのままでよいという気持ちの両方がある」で 47 件、続いて「現状を変えたい」が 27 件、

「わからない」が20件、「このままでよい」が14件であった。

〈結果〉

全体、B群ともに、「現状を変えたい気持ちとこのままでよいという気持ちの両方がある」が最も高かった。「現状を変えたい気持ちとこのままでよいという気持ちの両方がある」「現状を変えたい」は全体のうち72.4%、B群のうち55.6%であった。「このままでよい」「わからない」は、全体のうち26.8%、B群のうち20.1%であり、現状を変えたい気持ちがありながら葛藤し、身動きがとれなくなっている方が多いことが示された。また、若年層や10年未満のひきこもり状態にある方は現状を変えたい気持ちがみられ、中高年や10年以上のひきこもり状態にある方は現状を変えたい気持ちとこのままでよいという気持ちの両方がみられることから、長期化するにつれて両価的な思いが強まっていきやすい可能性が考えられた。一方で、ひきこもり状態にある本人の回答では「現状を変えたい」が最も多かったものの、本人以外の回答では「現状を変えたい気持ちとこのままでよいという気持ちの両方がある」が最も多かった。このことから、本人の気持ちが家族や周囲に伝わっておらず、家族や周囲が本人の現状への思いを察することが難しい状態にある可能性が考えられる。

※A群：ひきこもりがない世帯 B群：広義のひきこもり C群：準ひきこもり D群：狭義のひきこもり
E群：6か月未満の広義のひきこもり F群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

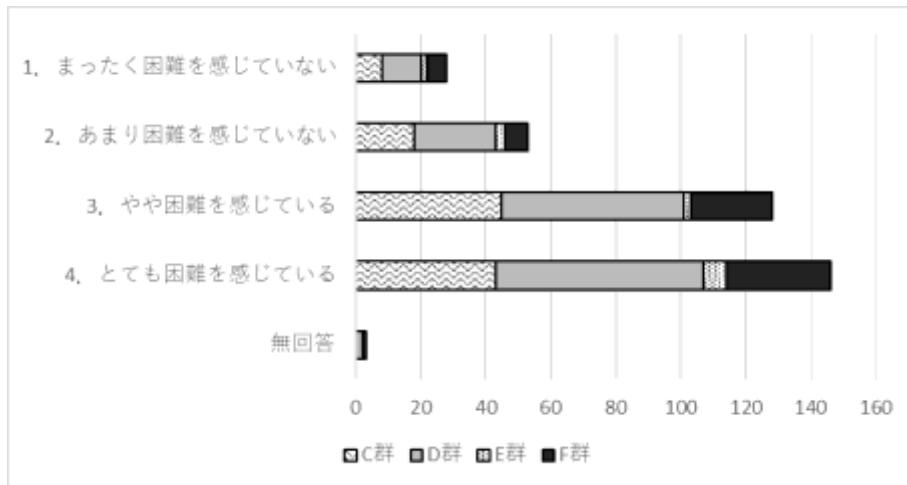
【ひきこもり状態にある方の社会参加に関する困難】

問 16「その方は社会参加に関して困難を感じていると思いますか。(1つだけ回答)」という質問の結果から、ひきこもり状態にある方の社会参加に関する困難は以下のとおりであった (Table 16-1, 16-2, 16-3)。

Table 16-1 (表) ひきこもり状態にある方の社会参加に関する困難

区分	全体		B		C		D		E		F	
1. まったく困難を感じていない	28	7.8%	20	5.6%	8	2.2%	12	3.4%	2	0.6%	6	1.7%
2. あまり困難を感じていない	53	14.8%	43	12.0%	18	5.0%	25	7.0%	3	0.8%	7	2.0%
3. やや困難を感じている	128	35.8%	101	28.2%	45	12.6%	56	15.6%	2	0.6%	25	7.0%
4. とても困難を感じている	146	40.8%	107	29.9%	43	12.0%	64	17.9%	7	2.0%	32	8.9%
無回答	3	0.8%	2	0.6%	0	0.0%	2	0.6%	0	0.0%	1	0.3%
合計	358	100.0%	273	76.3%	114	31.8%	159	44.4%	14	3.9%	71	19.8%

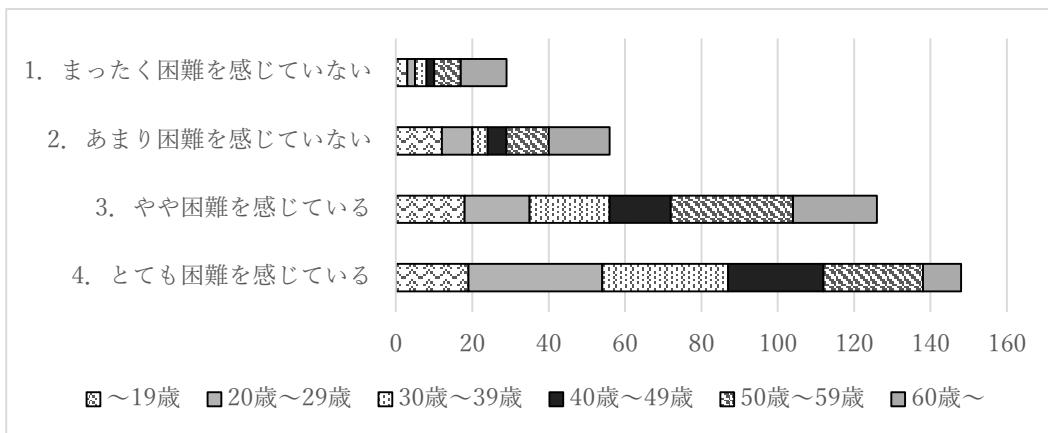
Table 16-1 (グラフ) ひきこもり状態にある方の社会参加に関する困難



最も高かったのは「とても困難を感じている」であり、146件で40.8%であった。続いて高かったのは「やや困難を感じている」であり、128件で35.8%であった。続いて、「あまり困難を感じていない」が53件で14.8%、「まったく困難を感じていない」が28件で7.8%であった。

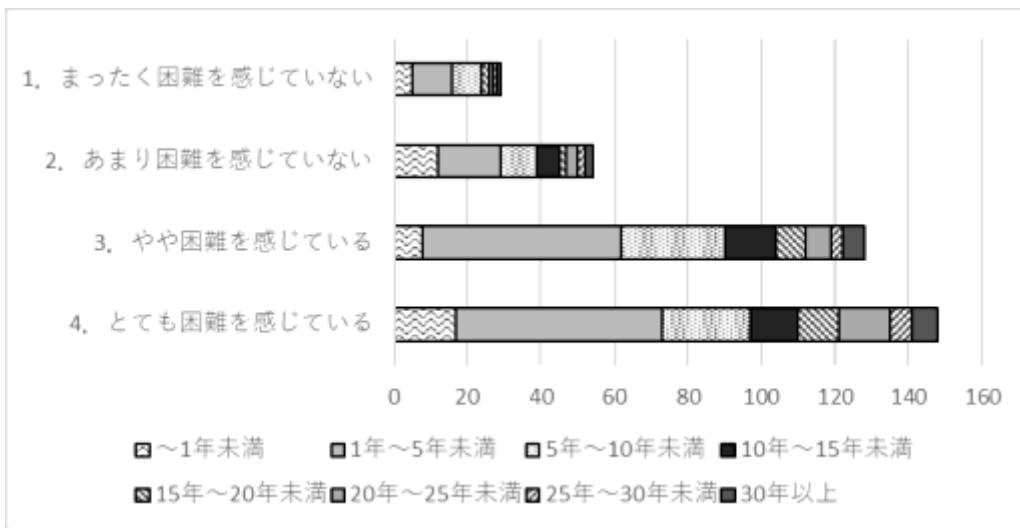
B群において、最も高かったのは「とても困難を感じている」であり、107件で29.9%であった。続いて高かったのは「やや困難を感じている」であり、101件で28.2%であった。続いて、「あまり困難を感じていない」が43件で12.0%、「まったく困難を感じていない」が20件で5.6%であった。

Table 16-2 (グラフ) ひきこもり状態にある方の社会参加に関する困難（各年齢層）



各年齢層の全体における、ひきこもり状態にある方の社会参加に関する困難さは Table16-2 のとおりである。「39歳以下」の年齢層において、最も高かったのは「とても困難を感じている」で 87 件、続いて「やや困難を感じている」が 56 件、「あまり困難を感じていない」が 24 件、「まったく困難を感じていない」が 8 件であった。「40歳以上」の年齢層において、最も高かったのは「やや困難を感じている」で 70 件、続いて「とても困難を感じている」が 61 件、「あまり困難を感じていない」が 32 件、「まったく困難を感じていない」が 21 件であった。

Table 16-3 (グラフ) ひきこもり状態にある方の社会参加に関する困難
(各ひきこもり期間)



各ひきこもり期間の全体における、ひきこもり状態にある方の社会参加に関する困難さは Table16-3 のとおりである。「10 年未満」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「とても困難を感じている」で 97 件、続いて「やや困難を感じている」で 90 件、

「あまり困難を感じていない」が 39 件、「まったく困難を感じていない」が 24 件であった。「10 年以上」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「とても困難を感じている」で 51 件、続いて「やや困難を感じている」が 38 件、「あまり困難を感じていない」が 15 件、「まったく困難を感じていない」が 5 件であった。

〈結果〉

全体、B 群ともに、「とても困難を感じている」が最も高かった。「とても困難を感じている」「やや困難を感じている」は全体のうち 76.6%、B 群のうち 58.1% であった。「あまり困難を感じていない」「まったく困難を感じていない」は、全体のうち 22.6%、B 群のうち 17.6% であり、多くの方々が社会参加に困難を感じていることが示された。また、若年層は「とても困難を感じている」が最も多く、中高年層は「やや困難を感じている」が最も多かったことから、若年層は社会参加をより困難に感じている可能性が考えられた。

※A 群：ひきこもりがない世帯 B 群：広義のひきこもり C 群：準ひきこもり D 群：狭義のひきこもり
E 群：6 か月未満の広義のひきこもり F 群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

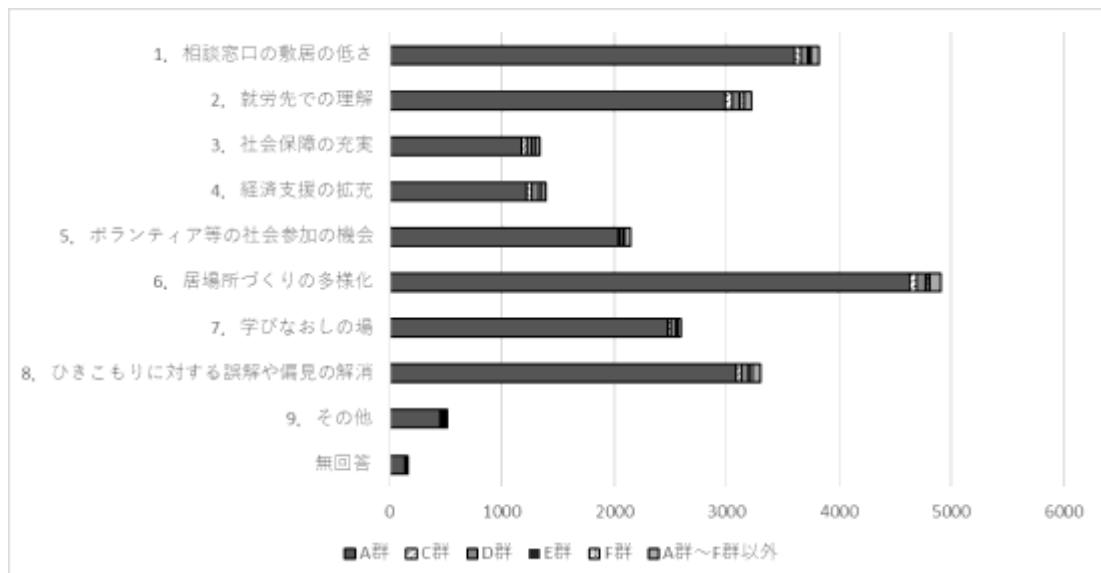
【ひきこもり状態にある方が社会参加をするために地域や社会に必要と思われる条件】

問17「世帯にひきこもり状態の方がいる・いないにかかわらずお訊きします。一般的に、ひきこもり状態にある方が社会参加をするためには、地域や社会に必要な条件は何だと思いますか。(複数回答可)」という質問の結果から、ひきこもり状態にある方が社会参加をするために地域や社会に必要と思われる条件は以下のとおりであった(Table 17-1, 17-2, 17-3)。

Table 17-1 (表) ひきこもり状態にある方が社会参加をするために
地域や社会に必要と思われる条件

区分	全体	A		B		C		D		E		F		A~F 以外		
1. 相談窓口の敷居の低さ	3,825	16.4%	3,608	15.4%	116	0.5%	50	0.2%	66	0.3%	5	0.0%	25	0.1%	71	0.3%
2. 就労先での理解	3,219	13.8%	2,993	12.8%	123	0.5%	56	0.2%	67	0.3%	9	0.0%	30	0.1%	64	0.3%
3. 社会保障の充実	1,336	5.7%	1,175	5.0%	94	0.4%	44	0.2%	50	0.2%	3	0.0%	28	0.1%	36	0.2%
4. 経済支援の拡充	1,392	6.0%	1,226	5.2%	101	0.4%	45	0.2%	56	0.2%	5	0.0%	26	0.1%	34	0.1%
5. ボランティア等の社会参加の機会	2,142	9.2%	2,037	8.7%	45	0.2%	18	0.1%	27	0.1%	0	0.0%	12	0.1%	48	0.2%
6. 居場所づくりの多様化	4,905	21.0%	4,628	19.8%	147	0.6%	63	0.3%	84	0.4%	5	0.0%	29	0.1%	96	0.4%
7. 学びなおすの場	2,595	11.1%	2,474	10.6%	74	0.3%	32	0.1%	42	0.2%	2	0.0%	14	0.1%	31	0.1%
8. ひきこもりに対する誤解や偏見の解消	3,299	14.1%	3,088	13.2%	109	0.5%	46	0.2%	63	0.3%	4	0.0%	27	0.1%	71	0.3%
9. その他	513	2.2%	455	1.9%	29	0.1%	10	0.0%	19	0.1%	2	0.0%	10	0.0%	17	0.1%
無回答	161	0.7%	139	0.6%	4	0.0%	1	0.0%	3	0.0%	0	0.0%	2	0.0%	16	0.1%
合計	23,387	100.0%	21,823	93.3%	842	3.6%	365	1.6%	477	2.0%	35	0.1%	203	0.9%	484	2.1%

Table 17-1 (グラフ) ひきこもり状態にある方が社会参加をするために
地域や社会に必要と思われる条件



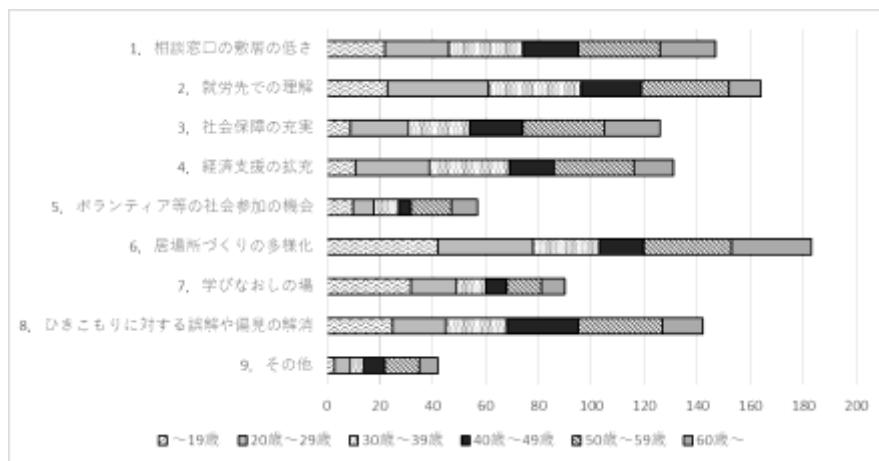
A群において、最も高かったのは「居場所づくりの多様化」であり、4,628件で19.8%であった。続いて、「相談窓口の敷居の低さ」が3,608件で15.4%、「ひきこもりに対する誤解や偏見の解消」が3,088件で13.2%、「就労先での理解」が2,993件で12.8%、「学びなおすの場」が2,474件で10.6%、「ボランティア等の社会参加の機会」が2,037件で8.7%、「経

济支援の拡充」が1,226件で5.2%であった。

B群～F群において、最も高かったのは「居場所づくりの多様化」であり、181件で0.8%であった。続いて、「就労先での理解」が162件で0.7%、「相談窓口の敷居の低さ」が146件で0.6%、「ひきこもりに対する誤解や偏見の解消」が140件で0.6%、「経済支援の拡充」が132件で0.6%、「社会保障の充実」が125件で0.5%、「学びなおしの場」が90件で0.4%であった。

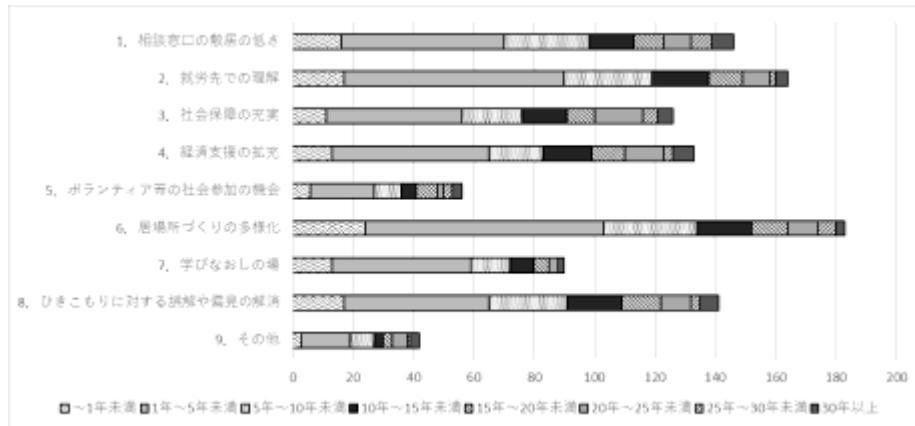
B群において、最も高かったのは「居場所づくりの多様化」であり、147件で0.6%であった。続いて、「就労先での理解」が123件で0.5%、「相談窓口の敷居の低さ」が116件で0.5%、「ひきこもりに対する誤解や偏見の解消」が109件で0.5%、「経済支援の拡充」が101件で0.4%、「社会保障の充実」が94件で0.4%、「学びなおしの場」が74件で0.3%であった

Table 17-2 (グラフ) ひきこもり状態にある方が社会参加をするために
地域や社会に必要と思われる条件 (各年齢層)



各年齢層の全体における、ひきこもり状態にある方が社会参加をするために地域や社会に必要と思われる条件はTable17-2のとおりである。「39歳以下」の年齢層において、最も高かったのは「居場所づくりの多様化」で103件、続いて「就労先での理解」が96件、「相談窓口の敷居の低さ」が74件、「経済支援の拡充」が69件、「ひきこもりに対する誤解や偏見の解消」が68件、「学びなおしの場」が60件、「社会保障の充実」が54件であった。「40歳以上」の年齢層において、最も高かったのは「居場所づくりの多様化」で80件、続いて「ひきこもりに対する誤解や偏見の解消」が74件、「相談窓口の敷居の低さ」が73件、「社会保障の充実」が72件、「就労先での理解」が68件、「経済支援の拡充」が62件、「学びなおしの場」が30件であった。

Table 17-3 (グラフ) ひきこもり状態にある方が社会参加をするために
地域や社会に必要と思われる条件（各ひきこもり期間）



各ひきこもり期間の全体における、ひきこもり状態にある方が社会参加をするために地域や社会に必要と思われる条件は Table17-3 のとおりである。「10 年未満」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「居場所づくりの多様化」で 134 件、続いて「就労先での理解」が 119 件、「相談窓口の敷居の低さ」が 98 件、「ひきこもりに対する誤解や偏見の解消」が 91 件、「経済支援の拡充」が 83 件、「社会保障の充実」が 76 件、「学びなoshi の場」が 72 件であった。「10 年以上」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「社会保障の充実」「経済支援の拡充」「ひきこもりに対する誤解や偏見の解消」で 50 件、続いて「居場所づくりの多様化」が 49 件、「相談窓口の敷居の低さ」が 48 件、「就労先での理解」が 45 件、「ボランティア等の社会参加の機会」が 20 件であった。

〈結果〉

A 群、全体、B 群すべてにおいて、「居場所づくりの多様化」が最も高かった。どの群も就労先での理解やひきこもりに対する誤解や偏見の解消、相談窓口の敷居の低さ、学びなoshi の場、経済支援の拡充が上位で概ね結果が一致しているが、A 群では「ボランティア等の社会参加の機会」が高く、全体、B 群では「社会保障の充実」が高いことが示された。また、若年層や 10 年未満のひきこもり状態にある方は就労先での理解が必要と思われやすく、中高年層や 10 年以上のひきこもり状態にある方は社会保障や経済支援、誤解や偏見の解消が必要と思われやすいことが示された。年齢層やひきこもり期間によって生活環境が異なり、若年層では就労や自立、中高年層では生活していくための資金が必要となるため、そのような背景によってニーズが変わることが考えられた。

※A 群：ひきこもりがない世帯 B 群：広義のひきこもり C 群：準ひきこもり D 群：狭義のひきこもり

E 群：6 か月未満の広義のひきこもり F 群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

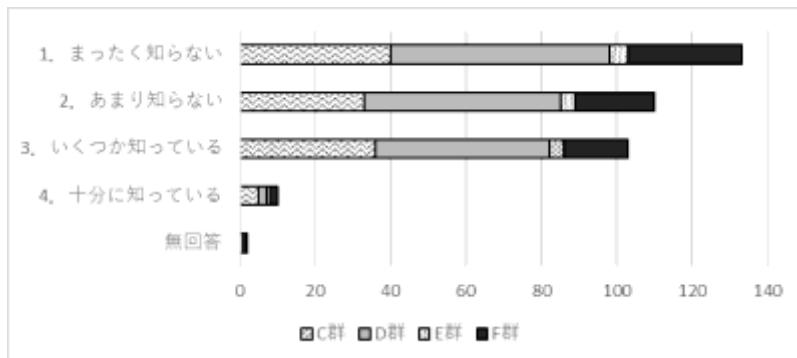
【ひきこもり状態にある方の相談機関や支援機関の認知】

問 18 「再びあなたの世帯に属するひきこもり状態にある方についてお聞きします。その方はひきこもりに関する相談機関や支援機関等（例：東京都ひきこもりサポートネット、東京都若者総合相談センター（若ナビα）、地域若者サポートステーション、東京しごとセンター、わかものハローワーク、保健所、東京都立精神保健福祉センター、東京都発達障害者支援センター、東京都教育相談センター、NPO 法人等の民間支援団体）を知っていますか。（1 つだけ回答）」という質問の結果から、ひきこもり状態にある方の相談機関や支援機関の認知に関しては以下のとおりであった（Table 18-1、18-2、18-3）。

Table 18-1 (表) ひきこもり状態にある方の相談機関や支援機関の認知

区分	全体	B		C	D	E		F	
		C	D			E	F		
1. まったく知らない	133 37.2%	98 27.4%	40 11.2%	58 16.2%	5 1.4%	30 8.4%			
2. あまり知らない	110 30.7%	85 23.7%	33 9.2%	52 14.5%	4 1.1%	21 5.9%			
3. いくつか知っている	103 28.8%	82 22.9%	36 10.1%	46 12.8%	4 1.1%	17 4.7%			
4. 十分に知っている	10 2.8%	7 2.0%	5 1.4%	2 0.6%	1 0.3%	2 0.6%			
無回答	2 0.6%	1 0.3%	0 0.0%	1 0.3%	0 0.0%	1 0.3%			
合計	358 100.0%	273 76.3%	114 31.8%	159 44.4%	14 3.9%	71 19.8%			

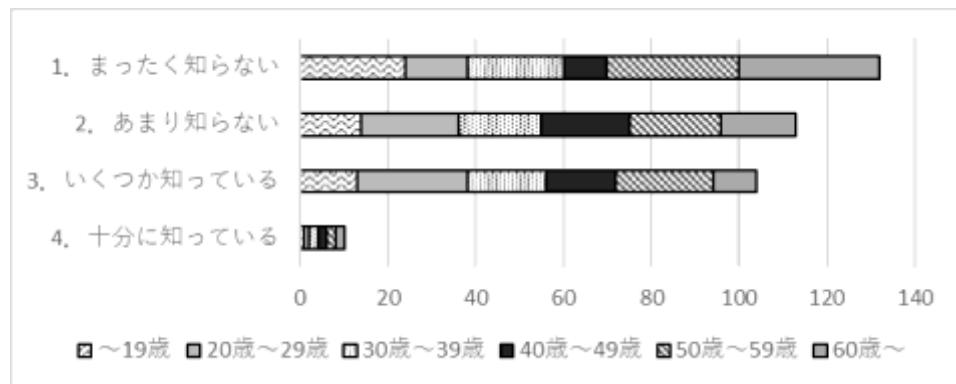
Table 18-1 (グラフ) ひきこもり状態にある方の相談機関や支援機関の認知



最も多かったのは「まったく知らない」であり、133 件で 37.2% であった。続いて、「あまり知らない」が 110 件で 30.7%、「いくつか知っている」が 103 件で 28.8%、「十分に知っている」が 10 件で 2.8% であった。

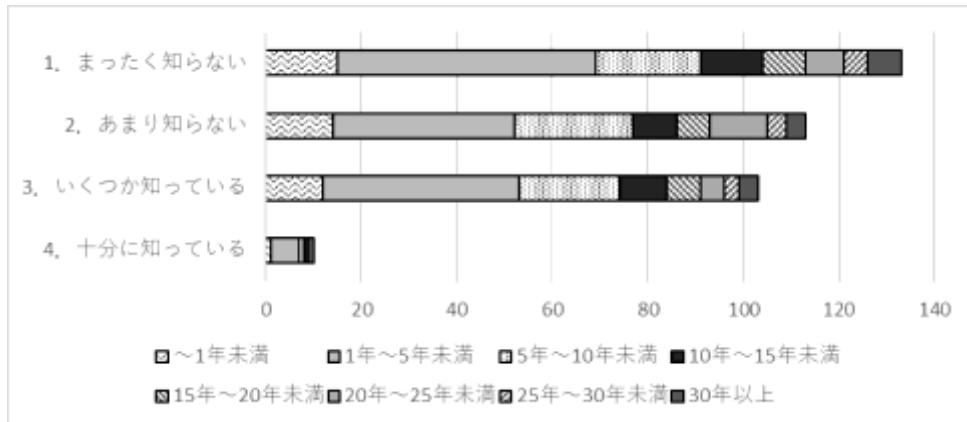
B 群において、最も多かったのは「まったく知らない」であり、98 件で 27.4% であった。続いて、「あまり知らない」が 85 件で 23.7%、「いくつか知っている」が 82 件で 22.9%、「十分に知っている」が 7 件で 2.0% であった。

Table 18-2 (グラフ) ひきこもり状態にある方の相談機関や支援機関の認知
(各年齢層)



各年齢層の全体における、ひきこもり状態にある方の相談機関や支援機関の認知はTable18-2のとおりである。「39歳以下」の年齢層において、最も高かったのは「まったく知らない」で60件、続いて「いくつか知っている」が56件、「あまり知らない」が55件、「十分に知っている」が4件であった。「40歳以上」の年齢層において、最も高かったのは「まったく知らない」で72件、続いて「あまり知らない」が58件、「いくつか知っている」が48件、「十分に知っている」が6件であった。

Table 18-3 (グラフ) ひきこもり状態にある方の相談機関や支援機関の認知
(各ひきこもり期間)



各ひきこもり期間の全体における、ひきこもり状態にある方の相談機関や支援機関の認知はTable18-3のとおりである。「10年未満」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「まったく知らない」で91件、続いて「あまり知らない」が77件、「いくつか知っている」が74件、「十分に知っている」が8件であった。「10年以上」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「まったく知らない」で42件、続いて「あまり知らない」が36件、「いくつか知っている」が29件、「十分に知っている」が2件であった。

〈結果〉

結果から、全体、B群とともに、「まったく知らない」が最も高かった。「まったく知らない」「あまり知らない」は全体のうち 67.9%、B群のうち 51.1%であった。「いくつか知っている」「十分に知っている」は、全体のうち 31.6%、B群のうち 24.9%であり、年齢層やひきこもり期間においても大きな違いはなく、多くの方が相談機関や支援機関を十分に認知していないことが示された。

※A群：ひきこもりがない世帯 B群：広義のひきこもり C群：準ひきこもり D群：狭義のひきこもり
E群：6か月未満の広義のひきこもり F群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

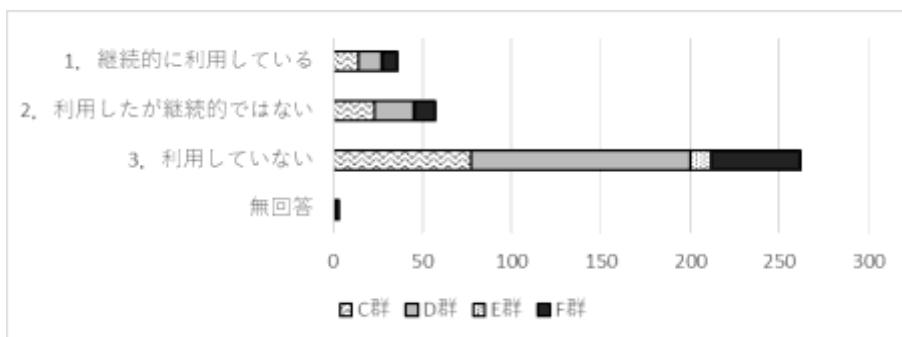
【ひきこもり状態にある方の相談機関や支援機関の利用状況】

問19「その方がひきこもりに関する相談機関や支援機関等を利用したことはありますか。(1つだけ回答)」という質問の結果から。ひきこもり状態にある方の相談機関や支援機関の利用状況は以下のとおりであった (Table 19-1、19-2、19-3)。

Table 19-1 (表) ひきこもり状態にある方の相談機関や支援機関の利用状況

区分	全体	B			C		D		E		F	
1. 継続的に利用している	36	10.1%	27	7.5%	14	3.9%	13	3.6%	1	0.3%	8	2.2%
2. 利用したが継続的ではない	57	15.9%	45	12.6%	23	6.4%	22	6.1%	1	0.3%	11	3.1%
3. 利用していない	262	73.2%	200	55.9%	77	21.5%	123	34.4%	12	3.4%	50	14.0%
無回答	3	0.8%	1	0.3%	0	0.0%	1	0.3%	0	0.0%	2	0.6%
合計	358	100.0%	273	76.3%	114	31.8%	159	44.4%	14	3.9%	71	19.8%

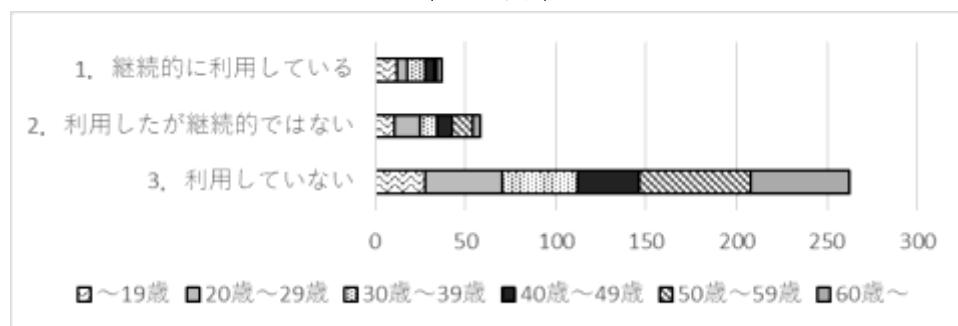
Table 19-1 (グラフ) ひきこもり状態にある方の相談機関や支援機関の利用状況



最も高かったのは「利用していない」であり、262件で73.2%であった。続いて、「利用したが継続的ではない」が57件で15.9%、「継続的に利用している」が36件で10.1%であった。

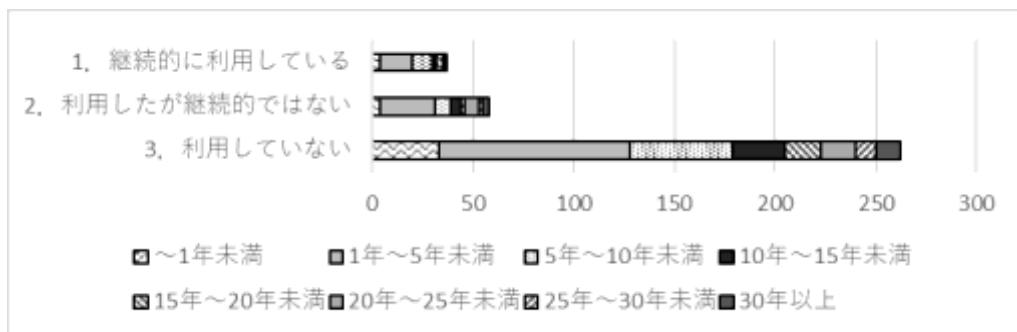
B群において、最も高かったのは「利用していない」であり、200件で55.9%であった。続いて、「利用したが継続的ではない」が45件で12.6%、「継続的に利用している」が27件で7.5%であった。

Table 19-2 (グラフ) ひきこもり状態にある方の相談機関や支援機関の利用状況
(各年齢層)



各年齢層の全体における、ひきこもり状態にある方の相談機関や支援機関の利用状況はTable19-2のとおりである。「39歳以下」の年齢層において、最も高かったのは「利用していない」で112件、続いて「利用したが継続的ではない」が34件、「継続的に利用している」が28件であった。「40歳以上」の年齢層において、最も高かったのは「利用していない」で150件、続いて「利用したが継続的ではない」が24件、「継続的に利用している」が9件であった。

**Table 19-3（グラフ） ひきこもり状態にある方の相談機関や支援機関の利用状況
(各ひきこもり期間)**



各ひきこもり期間の全体における、ひきこもり状態にある方の相談機関や支援機関の利用状況はTable19-3のとおりである。「10年未満」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「利用していない」で179件、続いて「利用したが継続的ではない」が39件、「継続的に利用している」が30件であった。「10年以上」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「利用していない」で83件、続いて「利用したが継続的ではない」が19件、「継続的に利用している」が7件であった。

「利用していない」理由の自由記述では、「内容を知らないため」といった相談機関や支援機関の存在や内容を知らないこと、「相談する必要を感じないため」といった相談や支援について意義を感じないことが挙げられた。「利用したが継続的ではない」理由の自由記述では、「本人の気持ちに寄りそえていない」といった本人のニーズに合わない対応、「困った時にだけ行く」といった不定期での利用が挙げられた。「継続的に利用している」理由の自由記述では、「話をきちんと聴いてもらえる」といった相談機関や支援機関に安心や信頼があること、「効果があると思っている」「ひきこもらないようにするため」といった相談機関への期待や現状への困り感、「医師、行政に勧められた」というような関係者や家族から勧められたことなどが挙げられた。

〈結果〉

全体、B群ともに、「利用していない」が最も高く、半数以上の方々が相談機関や支援機関を利用していないことが示された。利用に至らない、継続的な利用をしない理由として、

相談機関や支援機関の認知の薄さ、意義を感じられること、ニーズに合わない対応等が挙げられ、継続的な利用のためには十分に認知されること、安心や信頼があること、意義を感じられることが必要であり、関係者や家族が連携して相談機関や支援機関に繋いでいくことも重要である可能性が考えられる。

※A群：ひきこもりがない世帯 B群：広義のひきこもり C群：準ひきこもり D群：狭義のひきこもり
E群：6か月未満の広義のひきこもり F群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

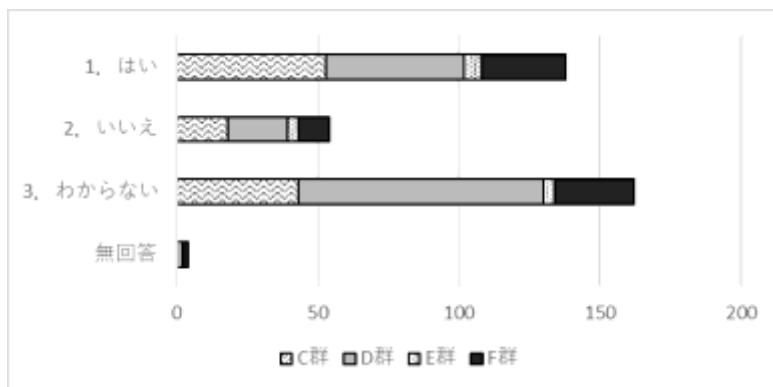
【ひきこもり状態にある方が何らかの支援を望んでいるか】

問20「これから生活していくうえで、その方は何らかの支援を望んでいると思いますか。(1つだけ回答)」という質問の結果から、ひきこもり状態にある方が何らかの支援を望んでいるかについては以下のとおりであった (Table 20-1, 20-2, 20-3)。

Table 20-1 (表) ひきこもり状態にある方が何らかの支援を望んでいるか

区分	全体		B	C		D		E		F		
				C	D	E	F					
1. はい	138	38.5%	102	28.5%	53	14.8%	49	13.7%	6	1.7%	30	8.4%
2. いいえ	54	15.1%	39	10.9%	18	5.0%	21	5.9%	4	1.1%	11	3.1%
3. わからない	162	45.3%	130	36.3%	43	12.0%	87	24.3%	4	1.1%	28	7.8%
無回答	4	1.1%	2	0.6%	0	0.0%	2	0.6%	0	0.0%	2	0.6%
合計	358	100.0%	273	76.3%	114	31.8%	159	44.4%	14	3.9%	71	19.8%

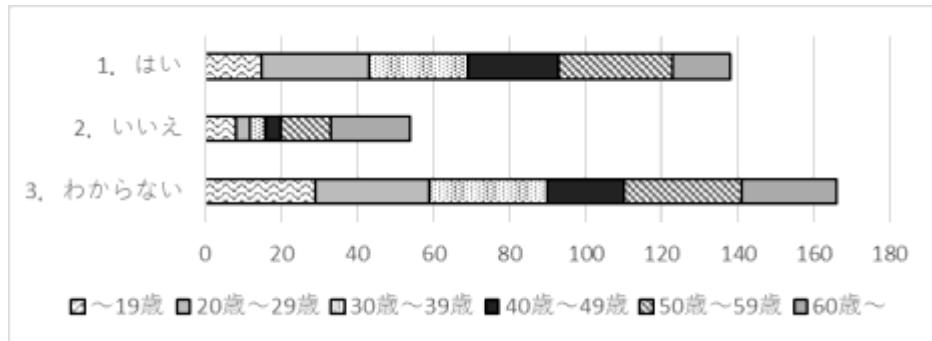
Table 20-1 (グラフ) ひきこもり状態にある方が何らかの支援を望んでいるか



最も高かったのは「わからない」であり、162件で45.3%であった。続いて、「はい」が138件で38.5%、「いいえ」が54件で15.1%であった。

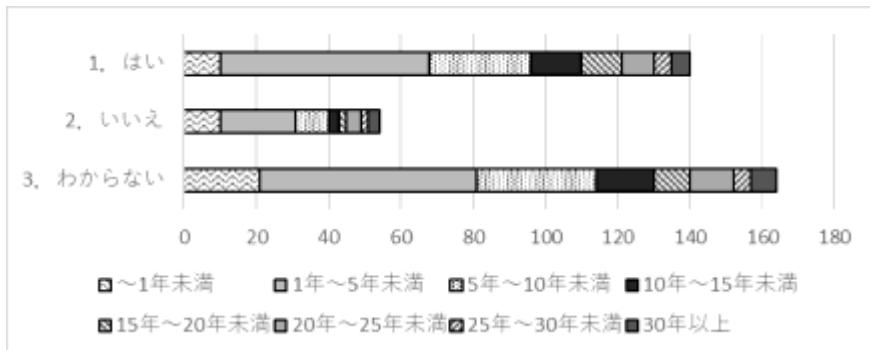
B群において、最も高かったのは「わからない」であり、130件で36.3%であった。続いて、「はい」が102件で28.5%、「いいえ」が39件で10.9%であった。

Table 20-2 (グラフ) ひきこもり状態にある方が何らかの支援を望んでいるか
(各年齢層)



各年齢層の全体における、ひきこもり状態にある方が何らかの支援を望んでいるかについては Table20-2 のとおりである。「39歳以下」の年齢層において、最も高かったのは「わからない」で 90 件、続いて「はい」が 69 件、「いいえ」が 16 件であった。「40歳以上」の年齢層において、最も高かったのは「わからない」で 76 件、続いて「はい」が 69 件、「いいえ」が 38 件であった。

Table 20-3 ひきこもり状態にある方が何らかの支援を望んでいるか (各ひきこもり期間)



各ひきこもり期間の全体における、ひきこもり状態にある方が何らかの支援を望んでいるかについては Table20-3 のとおりである。「10年未満」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「わからない」で 114 件、続いて「はい」が 96 件、「いいえ」が 40 件であった。「10年以上」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「わからない」で 50 件、続いて「はい」が 44 件、「いいえ」が 14 件であった。

〈結果〉

全体、B 群ともに、「わからない」が最も高く、支援を望んでいるかどうかわからないことが多いことが示された。年齢層やひきこもり期間においても結果は変わらなかった。「わからない」が多い理由として、これまでのアンケート結果から相談機関や支援機関の認知が

薄いために具体的な支援のイメージが沸きにくいこと、現状を変えたい気持ちとこのままでよいという気持ちの両方があるために「はい」や「いいえ」を選択しきれない可能性が考えられる。また、家族や周囲が本人に支援を望んでいるか話題にすることが難しく、それ故に「わからない」と回答している可能性も考えられる。

※A群：ひきこもりがいない世帯 B群：広義のひきこもり C群：準ひきこもり D群：狭義のひきこもり
E群：6か月未満の広義のひきこもり F群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

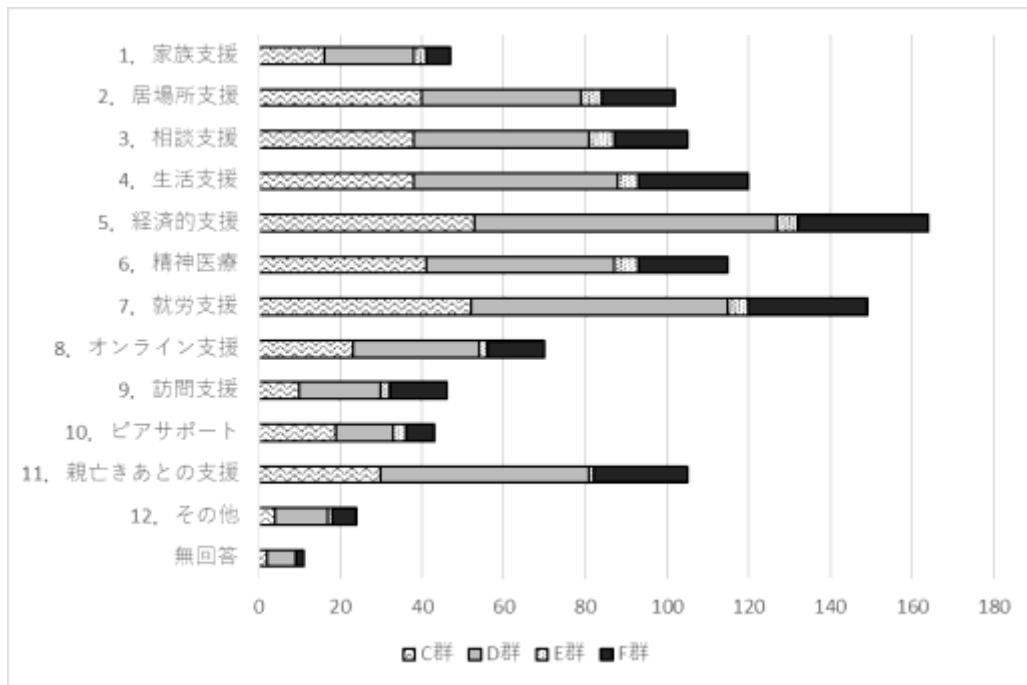
【ひきこもり状態にある方にとって充実してほしい資源・支援】

問 21 「その方にとって今後充実してほしいと考える資源・支援は何ですか？その方以外が回答者の場合、その方から見て必要と思われるものに回答してください。(複数回答可)」という質問の結果から、ひきこもり状態にある方にとって充実してほしい資源・支援は以下のとおりであった (Table 21-1、21-2、21-3)。

Table 21-1 (表) ひきこもり状態にある方にとって充実してほしい資源・支援

区分	全体	B			E	F
			C	D		
1. 家族支援	47	4.3%	38	3.5%	16	1.5%
2. 居場所支援	102	9.3%	79	7.2%	40	3.6%
3. 相談支援	105	9.5%	81	7.4%	38	3.5%
4. 生活支援	120	10.9%	88	8.0%	38	3.5%
5. 経済的支援	164	14.9%	127	11.5%	53	4.8%
6. 精神医療	115	10.4%	87	7.9%	41	3.7%
7. 就労支援	149	13.5%	115	10.4%	52	4.7%
8. オンライン支援	70	6.4%	54	4.9%	23	2.1%
9. 訪問支援	46	4.2%	30	2.7%	10	0.9%
10. ピアサポート	43	3.9%	33	3.0%	19	1.7%
11. 親亡きあの支援	105	9.5%	81	7.4%	30	2.7%
12. その他	24	2.2%	17	1.5%	4	0.4%
無回答	11	1.0%	9	0.8%	2	0.2%
合計	1,101	100.0%	839	76.2%	366	33.2%
			473	43.0%	44	4.0%
					218	19.8%

Table 21-1 (グラフ) ひきこもり状態にある方にとって充実してほしい資源・支援

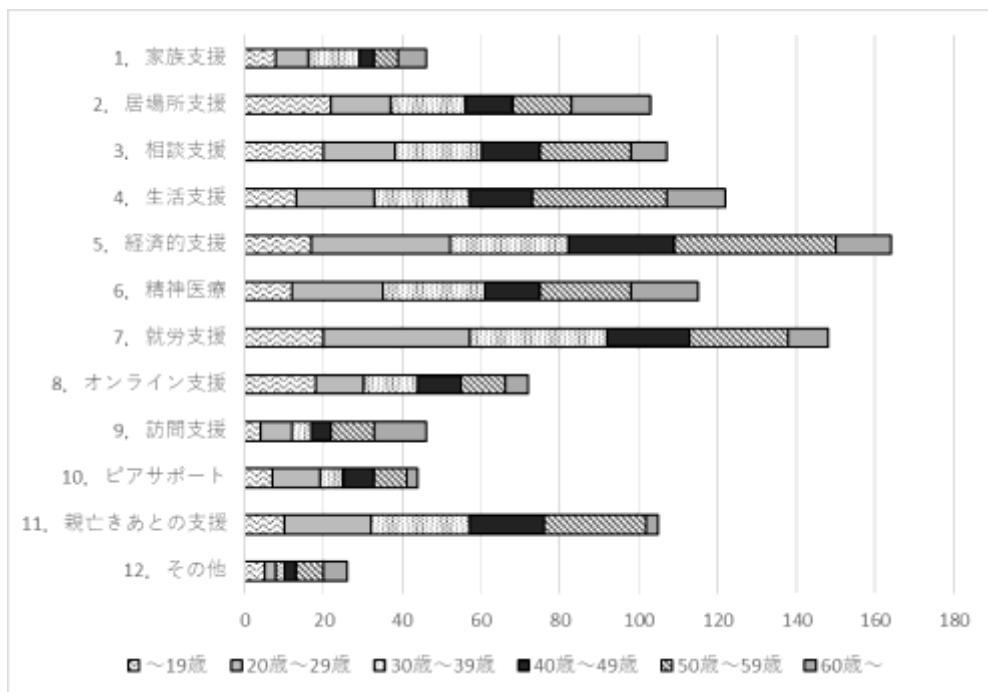


最も高かったのは「経済的支援」であり、164 件で 14.9% であった。続いて、「就労支援

（就労の相談、サポート）」が149件で13.5%、「生活支援」が120件で10.9%、「精神医療（薬物療法、精神療法、デイケア、訪問診療等）」が115件で10.4%、「相談支援（ひきこもり状態にある方の相談）」「親亡きあとの支援」が105件で9.5%、「居場所支援（ひきこもり状態にある方等の居場所）」が102件で9.3%であった。

B群において、最も高かったのは「経済的支援」であり、127件で11.5%であった。続いて、「就労支援（就労の相談、サポート）」が115件で10.4%、「生活支援」が88件で8.0%、「精神医療（薬物療法、精神療法、デイケア、訪問診療等）」が87件で7.9%、「相談支援（ひきこもり状態にある方の相談）」「親亡きあとの支援」が81件で7.4%、「居場所支援（ひきこもり状態にある方等の居場所）」が79件で7.2%であった。

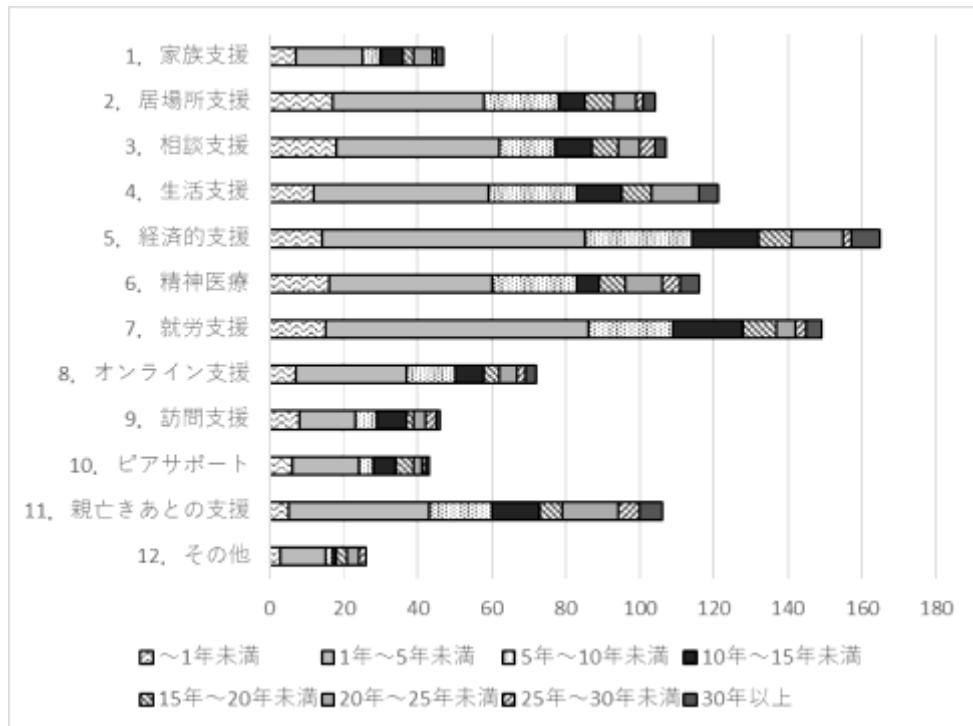
Table 21-2（グラフ） ひきこもり状態にある方にとって充実してほしい資源・支援
(各年齢層)



各年齢層の全体における、ひきこもり状態にある方にとって充実してほしい資源・支援はTable21-2のとおりである。「39歳以下」の年齢層において、最も高かったのは「就労支援（就労の相談、サポート）」で92件、続いて「経済的支援」が82件、「精神医療（薬物療法、精神療法、デイケア、訪問診療等）」が61件、「相談支援（ひきこもり状態にある方の相談）」が60件、「生活支援」「親亡きあとの支援」が57件、「居場所支援（ひきこもり状態にある方等の居場所）」が56件であった。「40歳以上」の年齢層において、最も高かったのは「経済的支援」で82件、続いて「生活支援」が65件、「就労支援（就労の相談、サポート）」が56件、「精神医療（薬物療法、精神療法、デイケア、訪問診療等）」が54件、「親亡きあとの支援」が52件、「居場所支援（ひきこもり状態にある方等の居場所）」が50件、「相談支援（ひきこもり状態にある方の相談）」が48件、「オンライン支援」が45件、「ピアサポート」が40件、「訪問支援」が35件、「家族支援」が30件であった。

きあとの支援」が48件、「居場所支援（ひきこもり状態にある方等の居場所）」「相談支援（ひきこもり状態にある方の相談）」が47件であった。

Table 21-3（グラフ） ひきこもり状態にある方にとって充実してほしい資源・支援
(各ひきこもり期間)



各ひきこもり期間の全体における、ひきこもり状態にある方にとって充実してほしい資源・支援はTable21-3のとおりである。「10年未満」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「経済的支援」で114件、続いて「就労支援（就労の相談、サポート）」が109件、「生活支援」「精神医療（薬物療法、精神療法、デイケア、訪問診療等）」が83件、「居場所支援（ひきこもり状態にある方等の居場所）」が78件、「相談支援（ひきこもり状態にある方の相談）」が77件、「親亡きあとの支援」が60件であった。「10年以上」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「経済的支援」で51件、続いて「親亡きあとの支援」が46件、「就労支援（就労の相談、サポート）」が40件、「生活支援」が38件、「精神医療（薬物療法、精神療法、デイケア、訪問診療等）」が33件、「相談支援（ひきこもり状態にある方の相談）」が30件、「居場所支援（ひきこもり状態にある方等の居場所）」が26件であった。

〈結果〉

全体、B群とともに、ひきこもり状態にある方は経済的支援の拡充を最も望んでおり、就労

支援や生活支援、親亡きとの支援、精神医療、相談先や居場所等の支援の拡充を望んでいることが示された。若年層や10年未満のひきこもり状態にある方は就労支援を望む傾向にあり、中高年層や10年以上のひきこもり状態にある方は親亡きとの支援を望むことが高まる傾向にあった。また、本人よりも本人以外の方が親亡きとの支援を望んでいることが示され、家族や周囲の方が本人よりも先々の心配をしている可能性が考えられた。なお、他のアンケート結果から回答者の相談機関や支援機関の認知が薄いことが考えられるため、結果の解釈には注意を要する。

※A群：ひきこもりがない世帯 B群：広義のひきこもり C群：準ひきこもり D群：狭義のひきこもり
E群：6か月未満の広義のひきこもり F群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

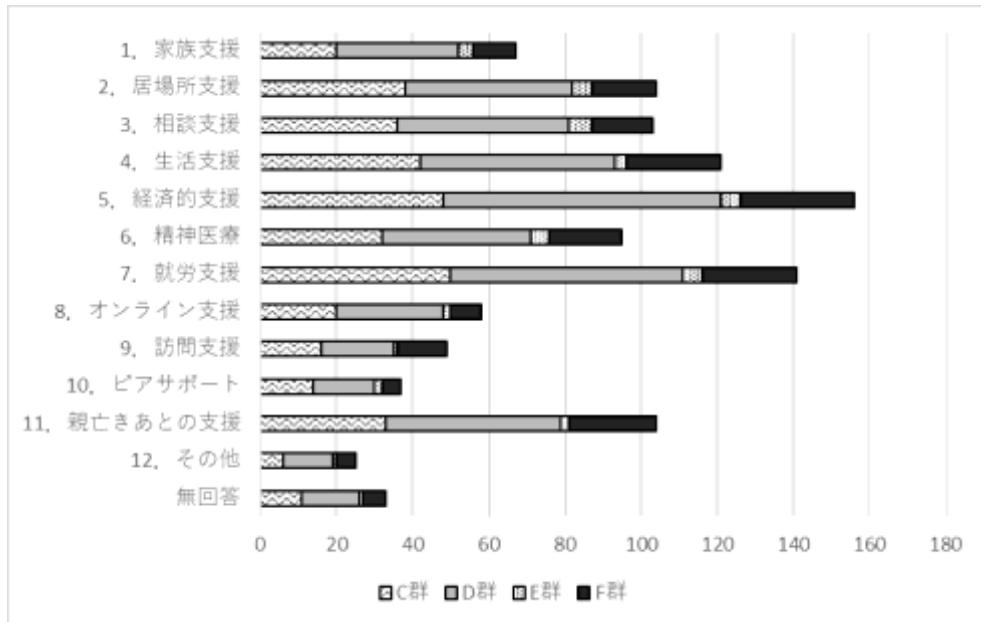
【ひきこもり状態にある方のご家族にとって充実してほしい資源・支援】

問 22 「ご家族の方にお聞きします。その方のご家族として今後充実してほしいと考える資源・支援は何ですか？ご家族以外が回答者の場合、ご家族から見て必要と思われるものに回答してください。(複数回答可)」という質問の結果から。ひきこもり状態にある方のご家族にとって充実してほしい資源・支援は以下のとおりであった (Table 22-1, 22-2, 22-3)。

Table 22-1 (表) ひきこもり状態にある方のご家族にとって充実してほしい資源・支援

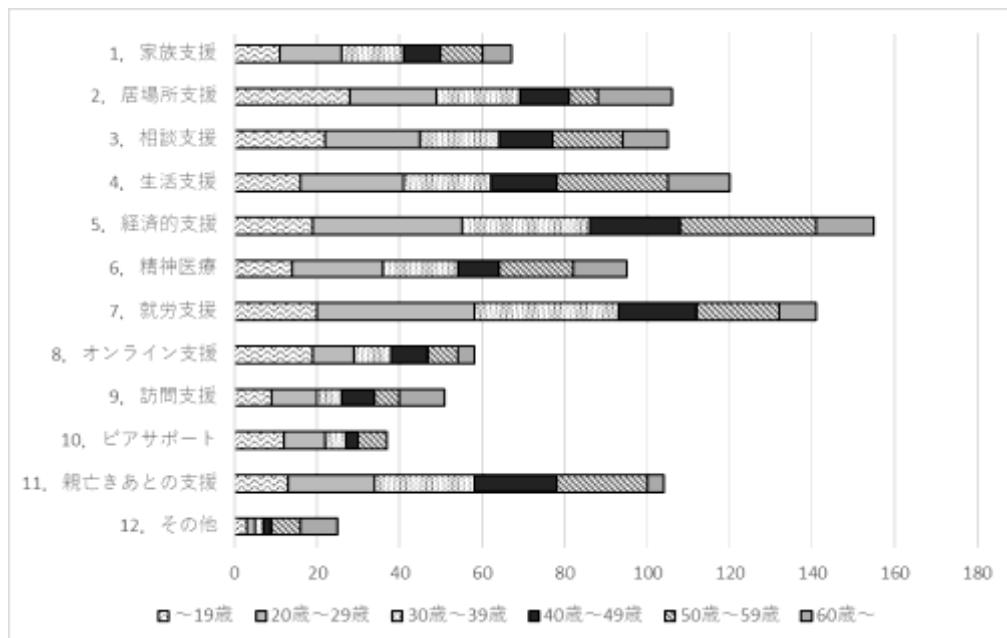
区分	全体	B	C		D		E		F	
1. 家族支援	67	6.1%	52	4.8%	20	1.8%	32	2.9%	4	0.4%
2. 居場所支援	104	9.5%	82	7.5%	38	3.5%	44	4.0%	5	0.5%
3. 相談支援	103	9.4%	81	7.4%	36	3.3%	45	4.1%	6	0.5%
4. 生活支援	121	11.1%	93	8.5%	42	3.8%	51	4.7%	3	0.3%
5. 経済的支援	156	14.3%	121	11.1%	48	4.4%	73	6.7%	5	0.5%
6. 精神医療	95	8.7%	71	6.5%	32	2.9%	39	3.6%	5	0.5%
7. 就労支援	141	12.9%	111	10.2%	50	4.6%	61	5.6%	5	0.5%
8. オンライン支援	58	5.3%	48	4.4%	20	1.8%	28	2.6%	2	0.2%
9. 訪問支援	49	4.5%	35	3.2%	16	1.5%	19	1.7%	1	0.1%
10. ピアサポート	37	3.4%	30	2.7%	14	1.3%	16	1.5%	2	0.2%
11. 親亡きあの支援	104	9.5%	79	7.2%	33	3.0%	46	4.2%	2	0.2%
12. その他	25	2.3%	19	1.7%	6	0.5%	13	1.2%	1	0.1%
無回答	33	3.0%	26	2.4%	11	1.0%	15	1.4%	1	0.1%
合計	1,093	100.0%	848	77.6%	366	33.5%	482	44.1%	42	3.8%
									203	18.6%

Table 22-1 (グラフ) ひきこもり状態にある方のご家族にとって充実してほしい資源・支援



最も高かったのは「経済的支援」であり、156件で14.3%であった。続いて、「就労支援（就労の相談、サポート）」が141件で12.9%、「生活支援」が121件で11.1%、「居場所支援（ひきこもり状態にある方等の居場所）」「親亡きあとの支援」が104件で9.5%、「相談支援（ひきこもり状態にある方の相談）」が103件で9.4%、「精神医療（薬物療法、精神療法、デイケア、訪問診療等）」が95件で8.7%であった。B群において、最も高かったのは「経済的支援」であり、121件で11.1%であった。続いて、「就労支援（就労の相談、サポート）」が111件で10.2%、「生活支援」が93件で8.5%、「居場所支援（ひきこもり状態にある方等の居場所）」が82件で7.5%、「相談支援（ひきこもり状態にある方の相談）」が81件で7.4%、「親亡きあとの支援」が79件で7.2%、「精神医療（薬物療法、精神療法、デイケア、訪問診療等）」が71件で6.5%であった。

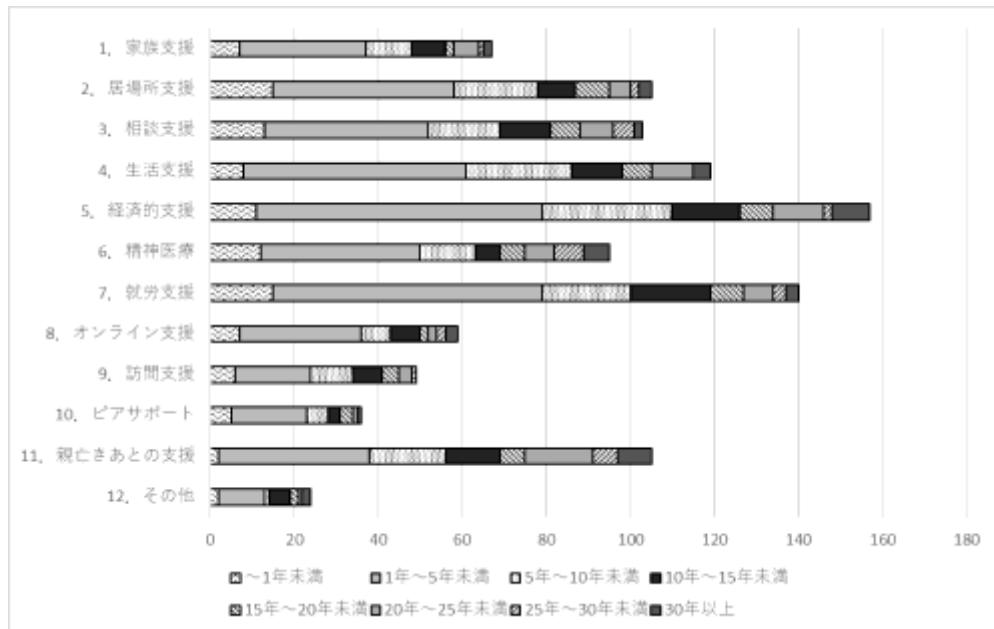
Table 22-2 (グラフ) ひきこもり状態にある方のご家族にとって充実してほしい資源・支援（各年齢層）



各年齢層の全体における、ひきこもり状態にある方のご家族にとって充実してほしい資源・支援はTable22-2のとおりである。「39歳以下」の年齢層において、最も高かったのは「就労支援（就労の相談、サポート）」で93件、続いて「経済的支援」が86件、「居場所支援（ひきこもり状態にある方等の居場所）」が69件、「相談支援（ひきこもり状態にある方の相談）」が64件、「生活支援」が62件、「親亡きあとの支援」が58件、「精神医療（薬物療法、精神療法、デイケア、訪問診療等）」が54件であった。「40歳以上」の年齢層において、最も高かったのは「経済的支援」で69件、続いて「生活支援」が58件、「就労支援（就労の相談、サポート）」が48件、「親亡きあとの支援」が46件、「相談支援（ひきこもり状

態にある方の相談)」「精神医療(薬物療法、精神療法、デイケア、訪問診療等)」が41件、「居場所支援(ひきこもり状態にある方等の居場所)」が37件であった。

Table 22-3 (グラフ) ひきこもり状態にある方のご家族にとって
充実してほしい資源・支援(各ひきこもり期間)



各ひきこもり期間の全体における、ひきこもり状態にある方のご家族にとって充実してほしい資源・支援はTable22-3のとおりである。「10年未満」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「経済的支援」で110件、続いて「就労支援(就労の相談、サポート)」が100件、「生活支援」が86件、「居場所支援(ひきこもり状態にある方等の居場所)」が78件、「相談支援(ひきこもり状態にある方の相談)」が69件、「精神医療(薬物療法、精神療法、デイケア、訪問診療等)」が63件、「親亡きあとの支援」が56件、「家族支援(家族会や家族の個別相談)」が48件であった。「10年以上」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「親亡きあとの支援」で49件、続いて「経済的支援」で47件、「就労支援(就労の相談、サポート)」が40件、「相談支援(ひきこもり状態にある方の相談)」が34件、「生活支援」が33件、「精神医療(薬物療法、精神療法、デイケア、訪問診療等)」が32件であった。

〈結果〉

全体、B群ともに、ひきこもり状態にある方の家族は経済的支援の拡充を最も望んでいた。また、就労支援や生活支援、親亡きあとの支援、精神医療、相談先や居場所等の支援の拡充も望んでいることが示された。若年層や10年未満のひきこもり状態にある方の家族は

就労支援を望む傾向にあり、中高年層や10年以上のひきこもり状態にある方の家族は親亡きあと支援を望むことが高まる傾向にあった。また、本人よりも本人以外の方が親亡きあと支援を望んでいることが示され、家族や周囲の方が本人よりも先々の心配をしている可能性が考えられた。なお、他のアンケート結果から回答者の相談機関や支援機関の認知が薄いことが考えられるため、結果の解釈には注意を要する。

※A群：ひきこもりがない世帯 B群：広義のひきこもり C群：準ひきこもり D群：狭義のひきこもり
E群：6か月未満の広義のひきこもり F群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

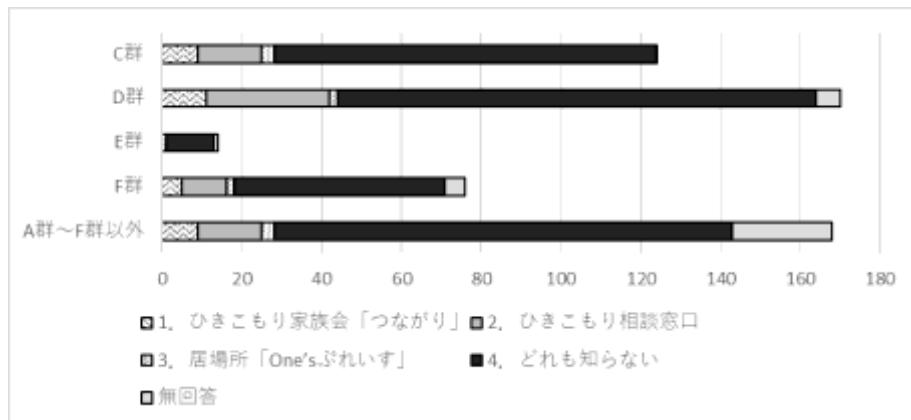
【東大和市のひきこもり支援に関する認知】

問 23「東大和市がひきこもり支援として実施している取組みで知っているものに回答してください。(複数回答可)」という質問の結果から、東大和市のひきこもり支援に関する認知は以下のとおりであった (Table 23-1、23-2、23-3)。

Table 23-1 (表) 東大和市のひきこもり支援に関する認知

区分	全体		A		B		C		D		E		F		A~F 以外	
		%		%		%		%		%		%		%		%
1. ひきこもり家族会「つながり」	183	2.5%	149	2.0%	20	0.3%	9	0.1%	11	0.1%	0	0.0%	5	0.1%	9	0.1%
2. ひきこもり相談窓口	719	9.7%	645	8.7%	47	0.6%	16	0.2%	31	0.4%	0	0.0%	11	0.1%	16	0.2%
3. 居場所「One's ぶれいす」	86	1.2%	75	1.0%	5	0.1%	3	0.0%	2	0.0%	1	0.0%	2	0.0%	3	0.0%
4. どれも知らない	6,310	85.0%	5,914	79.6%	216	2.9%	96	1.3%	120	1.6%	12	0.2%	53	0.7%	115	1.5%
無回答	129	1.7%	92	1.2%	6	0.1%	0	0.0%	6	0.1%	1	0.0%	5	0.1%	25	0.3%
合計	7,427	100.0%	6,875	92.6%	294	4.0%	124	1.7%	170	2.3%	14	0.2%	76	1.0%	168	2.3%

Table 23-1 (グラフ) 東大和市のひきこもり支援に関する認知

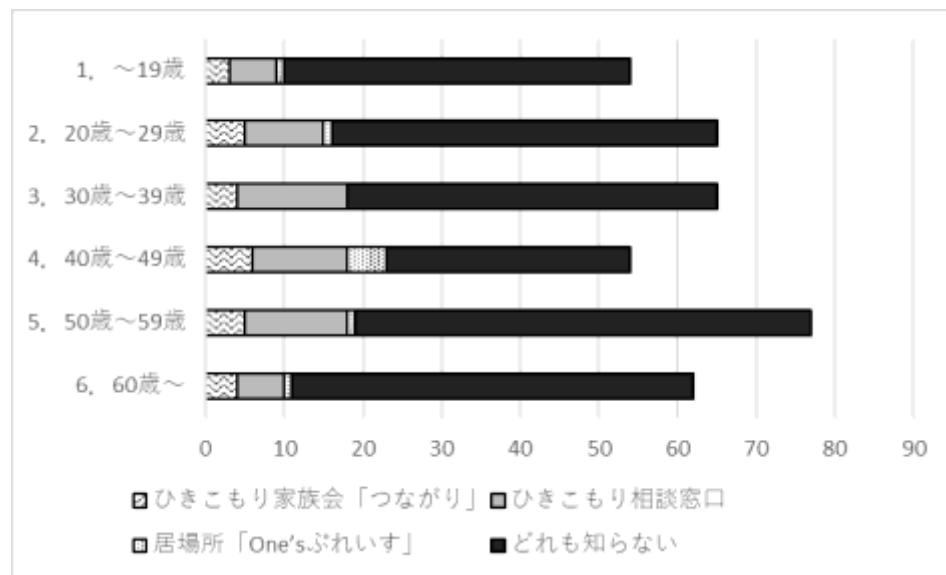


A群において、最も高かったのは「どれも知らない」であり、5,914件で79.6%であった。続いて、「ひきこもり相談窓口」が645件で8.7%、「ひきこもり家族会「つながり」」が149件で2.0%、「居場所「One's ぶれいす」」が75件で1.0%であった。

B群～F群において、最も高かったのは「どれも知らない」であり、281件で3.8%であった。続いて、「ひきこもり相談窓口」が58件で0.8%、「ひきこもり家族会「つながり」」が25件で0.3%、「居場所「One's ぶれいす」」が8件で0.1%であった。

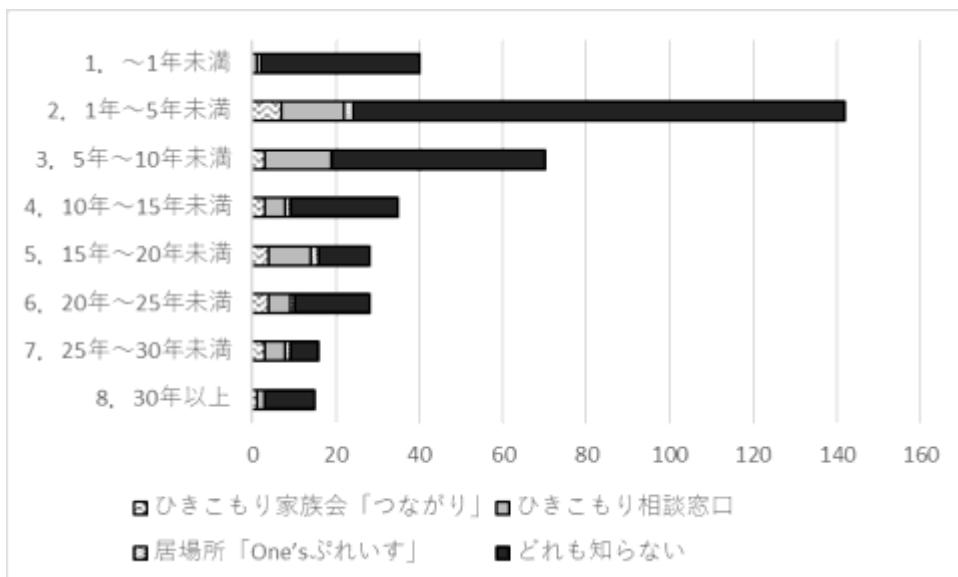
B群において、最も高かったのは「どれも知らない」であり、216件で2.9%であった。続いて、「ひきこもり相談窓口」が47件で0.6%、「ひきこもり家族会「つながり」」が20件で0.3%、「居場所「One's ぶれいす」」が5件で0.1%であった。

Table 23-2 (グラフ) 東大和市のひきこもり支援に関する認知（各年齢層）



各年齢層の全体における、東大和市のひきこもり支援に関する認知は Table23-2 のとおりである。「39歳以下」の年齢層において、最も高かったのは「どれも知らない」で 140 件、続いて「ひきこもり相談窓口」が 30 件、「ひきこもり家族会「つながり」」が 12 件、「居場所「One's ぶれいす」」が 2 件であった。「40 歳以上」の年齢層において、最も高かったのは「どれも知らない」で 140 件、続いて「ひきこもり相談窓口」が 31 件、「ひきこもり家族会「つながり」」が 15 件、「居場所「One's ぶれいす」」が 7 件であった。

Table 23-3 (グラフ) 東大和市のひきこもり支援に関する認知（各ひきこもり期間）



各ひきこもり期間の全体における、東大和市のひきこもり支援に関する認知は Table23-3 のとおりである。「10年未満」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「どれも知らない」で 207 件、続いて「ひきこもり相談窓口」が 32 件、「ひきこもり家族会「つながり」」が 10 件、「居場所「One's ぶれいす」」が 3 件であった。「10年以上」ひきこもり状態にある方々において、最も高かったのは「どれも知らない」で 75 件、続いて「ひきこもり相談窓口」が 27 件、「ひきこもり家族会「つながり」」が 15 件、「居場所「One's ぶれいす」」が 5 件であった。

〈結果〉

A 群、全体、B 群すべてにおいて、「どれも知らない」が最も高く、ひきこもり状態の有無に関わらず、東大和市のひきこもり支援に関する認知が薄いことが示された。年齢層やひきこもり期間による違いはみられなかった。

※A 群：ひきこもりがない世帯 B 群：広義のひきこもり C 群：準ひきこもり D 群：狭義のひきこもり
E 群：6か月未満の広義のひきこもり F 群：統合失調症や身体的病気・障害によるもの

【ひきこもり支援に関するご意見】

問 24 「その方やご家族にとって、求めているサービスや支援があれば自由にご記入ください。また、ひきこもり状態にある方がいない世帯の方も、どのようなサービスや支援があるとよいと思うかご記入ください。」という質問の結果から、2,831 件の回答が得られた。
(一部掲載)

〈広報に関するご意見〉

- ・「ひきこもり家族会」や「One's ぶれいす」といった存在を市民の多くは知らない。もっと広報すべきでは。
- ・今ある市のサービスなどが簡単に受けられることを知って頂くために、情報を広く伝える努力をしてほしい。
- ・相談する場所が分かりづらいのでもっとアピールして欲しい。
- ・正直、身近にひきこもり対象者がいないので、今回の調査が送られてくるまで考えたことがなかった。私自身も市の支援がどのようなものか全く分からなかったが、理解する良いきっかけとなった。気軽に相談できる窓口があることをもっと色々なところで発信すれば良いと思う。

〈ひきこもりへの誤解・偏見に関するご意見〉

- ・ひきこもりも一種の多様性だと考える。単なる生き方の選択肢のひとつに過ぎない。本人に合った生き方、自分のペースで生き方を探求していってほしい。
- ・ひきこもっている本人や、その家族には、「ひきこもり」に対してひけ目やうしろめたさを感じている場合が多く、他人に知られたくないと隠す傾向があると思う。ひきこもりはちょっとしたきっかけで誰にでも起りうるということを社会に広めることが大切だと思う。
- ・市役所や精神科に相談に行くということが、「恥ずかしいこと」「家の中の状況を他人に知られたくない」「役所や病院は信用できない」と思っている親も多いように感じるので、親の意識や偏見を無くすことも必要だと思う。
- ・ひきこもり状態の家人がいることが恥、隠すべきという心理がひきこもりを長期化させると思います。ひきこもる理由も様々です。もっとオープンに家にひきこもっている人がいるということを当たり前に言える社会になると良い。
- ・NHKラジオで月末1回放送している「ひきこもりラジオ」を、ひきこもりでない人にも広く宣伝できないか。本人が社会参加を望まないのは個々の理由があると思うが、社会で生きづらい問題があって、安心して生きられないからだと思う。
- ・実際にひきこもり状態にある人が、自ら社会参加するきっかけや支援を求めるのは難しいことだと思います。相談窓口や社会保障、経済支援も必要な事だと思いますが、まずは地域や社会の一般的なひきこもりに対する誤解や偏見を解消し、出来るだけ正しい理解を

していくことが大切だと思います。ひきこもりになってしまった人が、社会に復帰することがどれ程の勇気が必要か、多くの人が理解していけると良いと思います。

〈家族支援、居場所づくりに関するご意見〉

- ・支えていく家族の大変さを周りももう少し理解して、地域で支えていければと思います。
- ・まずは親や家族が相談しやすい窓口、同じ境遇の方達が集まれる居場所づくりが必要。
- ・一番近くで関わっている家族の心のケアが必要なのかと思います。相談できる相手、場所があるだけで救われると思う。
- ・ひきこもり状態にある方の支援は充実したものであって欲しいと思いますが、その家族を支えるサポートも同じように充実されなければ心身ともに健康を継続できないと思います。どちらも居場所が大切です。
- ・当事者同士の交流の場があると良いと思います。同じ悩みや体験を聞くことで、心が少しでも軽くなり一歩前に進めるようになったら良い。
- ・同じ悩みを持つ本人同士や家族同士が、安心して悩みを打ち明けられる場を設ける。その方やご家族の悩みが本当に理解出来るのは、同じ悩みや経験を持つ人にしか分からない。
- ・居場所作りの多様化。知り合いのお子さんがひきこもりと自認していましたが、他者との趣味の繋がりから活動が活発になり、現在は社会生活が送られているので、個々の居場所が多様化することでひきこもりで困っている方が社会生活に順応できるのではないかと思います。
- ・私の住んでいる近くに市民農園があり、同好の方々が和気あいあいと熱心に作物に励んでいますが、このようなサービスは市の農業政策としてだけでなく、ひきこもりの方の居場所づくりの多様化にも役立つのではないかと思いました。

〈相談窓口に関するご意見〉

- ・ひとりひとり状況が異なると思うので、カウンセラーを増員するなどして、きめ細かな対応ができると良いと思う。
- ・いろいろな条件でひきこもりの状態になると思うので、相談員を多くしてほしいです。相談員が多いと性格が合う人もいて話しやすくなると思うので。
- ・相談があった時に、即、対応できることが大事だと思います。相談員がいない、忙しくて相手ができず対応に時間がかかる等では、支援としては意味がないのではと思います。

〈ひきこもり支援に関するご意見〉

- ・本人が変わろうと思わない限り、周りが何を言っても難しいところはありますが、本人自身「このままではいけない」と苦しんでいるのは確かです。複数の支援先が必要かと思います。
- ・時間をかけて根気強くひきこもりの方やご家族のサポートをしていくことが大切なのか

なと思います。(話を聞くだけでも良いと思います。)

- ・安心して受けられる支援がどれか分からず。調べると、高額なお金が必要なものもあり怖い。
- ・子供の頃よりいじめにあい、自分の意見をつぶされ、人との会話に自信をなくしている状況。居場所、オンライン、ピアサポート支援等の拡充を至急お願いします。
- ・経済的支援ならびに親亡きあと支援は欠かせない支援だと思います。
- ・親の介護と自身の社会復帰を同時に抱え、親亡き後の孤独と困窮に不安を感じている高齢のひきこもりに対する支援を充実させてほしい。
- ・発達障害や精神障害を原因とするコミュニケーション能力不足を抱えた人に対して、様々な居場所を提案し、実際に同伴してコミュニティへの参加をサポートしてくれるサービスや支援が欲しい。
- ・専門の支援者やピアサポートによるアウトリーチ、長期的な支援、様々なタイプの居場所を選択できるよう複数の居場所支援。
- ・静かに話を聞いてくれる人、自分の意見や社会の見識にとらわれず、寄り添ってくれる人が必要。
- ・社会復帰したいと考えている方に対して、サービスや支援の選択肢を広げることについては当然あるべき姿だと思うが、社会復帰をためらっている方に対して、ややもすると復帰を無理強いする形にはしないか強く危惧している。
- ・相談先が多いのはいいが、横のつながりを持ってないので非効率。
- ・ひきこもりのご家族をかかえる方が市の窓口に相談するのは、周囲に知られたくないなどの問題があると思います。市以外の国やNPOを知る方法があれば良いのではないかと思いました。
- ・なかなか家を一步出ることができない方々にとっては、まずは「オンライン支援」等を充実していただくと、初めの糸口となるのでは。
- ・SNSなどを使用した相談のきっかけになるようなサービスがあると電話や対面相談に躊躇している方も連絡しやすいと考えます。
- ・本当にひきこもりに対して支援していくとするなら、24時間相談OKにするとか、LINEやチャットでも対応できるようにするとか、ひきこもりさんたちの目線で考えていかないと難しいと思います。
- ・私自身、いじめが原因で中学生の頃にひきこもりを経験したことがあります。すべての方がそうとは言い切れませんが、閉じこもりたくてひきこもりをしている人はいないと思います。私はひきこもることで、周囲へのSOSと自分の心と向き合い、答えを出すことができました。結果を責めずに沢山の選択があるということを知ることが大切だと思います。
- ・ひきこもっている立場の人は、お金よりも社会との繋がり・働きがいを求めていると思います。生活困窮者でも制度の網に掛からない方は、どこに相談したらよいか分からないし、

諦めている方も潜在的に多いのではないかと思う。お金で代えられないもの=心のサポート、ここにもフォーカスしてほしいです。

- ・私は長い間、うつ病でした。家庭環境も悪く小学校ではいじめにあっていました。相談も話を出来る相手もいませんでした。今でも思いますが、少しでも話を聞いてくれる人がいたら少しは前向きになれてたのかなあと思います。ひきこもりでも本当は社会へ出て働きなり社会活動をしたいという人のほうが多数だと思うので、やはり電話なりメールなどで相談に乗るのが一番なのかなと思います。
- ・学生の頃は不登校になりひきこもりの経験があります。いじめだけでなく、家庭不和や心の拠り所なれる場所が極端に少なく、弱みをさらけ出せない状態です。支援や良くしてくれる人を、良い人だなとは思いつつ、仕方なくやってるんだろう、どうせ自分なんて…など卑屈な状態にもなります。ただ、同時にこのままじゃいけない、なんとかしなきゃいけないという気持ちは常に頭の片隅にあり、それができない自分への無意識の攻撃も含めて、心を蝕み続けます。ひきこもりの方に、インターネットを通じて相談したり、在宅ワークでできる仕事の提案なども、非常に大切だと思います。成功体験や、居場所を感じる空間、社会貢献できているという実感は、いずれひきこもりを解消します。支援の枠組みにひきこもりの方を当てはめるという考え方より、ひきこもりの方に合わせた社会へ繋がる窓口や場所を提供する考え方のほうが良いかなと思います。

〈就労支援に関するご意見〉

- ・働いた経験がなくこのまま歳をとっていくのが心配。親がいなくなってしまったらどうやって生活していくのか、今後がすごく心配。
- ・今まで就職したことがほぼないため、アルバイトに応募しても理解を得られずなかなか採用に至らない。こういう人でも就職の機会を得られるよう、企業に理解を求めていただきたい。また、理解のある企業を紹介していただきたい。
- ・決して好きでひきこもっている訳ではありません。仕事をしたいと思っていても年齢でまず落とされる、無職の期間が長いと何が自分で出来るのか自信がなくなり、どうしたらよいか分からない負のループに入ってしまうので、就学や就労支援がもっと身近に感じると良いと思う。
- ・統合失調症という病で、回復はしていますが完治していないため、本人は就労を希望しているが、なかなか難しい。就労支援のサポートがあれば、前向きになれると思います。
- ・スマートフォンを使用しての入力作業や文章の作成・校正作業などを紹介してもらえる支援があればありがたいです。

〈本調査に関するご意見〉

- ・ひきこもりに近い家族がいた身からすると、封筒の「ひきこもり実態調査のお願い」はちょっと気になるし、家族の目に触れさせたくないと思いました。

- ・「ひきこもり」といった言葉を印刷した封筒は使わない方がいいのでは。プライベートかつデリケートな問題なのでそこは改善すべきだと思います。
- ・行政がひきこもりのために税金を使うのは止めて頂きたい。親や本人の責任であり、関係のない者にとっては迷惑な支援だ。
- ・ひきこもりについて支援や、家族会等の活動をしていることも知らなかった。このアンケートで少し関心を持ち、考えるきっかけになりました。
- ・このようなアンケートも、ある種の啓発になります。今後も、継続してひきこもり支援や啓発等をしていっていただけたらと思います。

III. まとめ資料

1. 考察

(1) 東大和市のひきこもり状態にある方

本調査のひきこもりの定義に該当する世帯では、50 歳以降の年齢層が相対的に高い割合であるのに対して、従来のひきこもりの定義(※)に該当する世帯では、39 歳以下の若年層も 50 歳以降の高年齢層と同程度の割合であった。ひきこもり状態にある方が 1 人以上いる世帯の割合をもとに、調査対象世帯の推計値を求めると、本調査のひきこもりの定義に該当する世帯が 1,413.5 件、従来のひきこもりの定義に該当する世帯が 1,077.9 件であった。それだけの人数を支援できる支援体制を整える必要があると考えられる。相談機関や支援機関の支援体制の整備だけでなく、関係機関同士のネットワークや連携を強めることにより、該当する人々に支援を提供できるよう努める必要があるといえる。

※従来のひきこもりの定義とは、様々な要因の結果として社会的参加を回避し、原則的には、6 か月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態を指す現象概念である。

(2) ひきこもり状態にある方の背景

ひきこもり状態にある方の性別の割合は、女性よりも男性の方が多かった。ただし、女性もひきこもり状態にある方の 4 割を占めていることは留意する必要がある。ひきこもり状態にある方の最終学歴は高等学校や大学・大学院が多く、ひきこもり状態になった時期は若年層が多かった。ひきこもり状態は 1~5 年未満の期間が最も多く、中高年層の方が若年層よりもひきこもり状態の期間が長いことが示された。ひきこもり状態になったきっかけは、人間関係が上手くいかないことが最も多く、病気や障害、学校や職場での不適応、退職や不登校であった経緯、いじめや事件・事故等のトラウマがきっかけとなることが多かった。中高年層でひきこもり状態になった方は病気をきっかけになることが最も多く、10 年以上の長期化したひきこもり状態の方はいじめや事件・事故等のトラウマがきっかけとなることが高くなる傾向にあり、長期化の一要因としてトラウマの影響が推察される。これらの多様な背景をきっかけにしてひきこもり状態にあることを踏まえ、本人の気持ちを考えた支援の在り方を整えていく必要があると思われる。

(3) ひきこもり状態にある方の状況や心配

ひきこもり状態にある方は両親や兄弟姉妹といった家族と同居していることが最も多く、主に同居家族の就労や事業による収入で生活していることが多かった。ひきこもり期間が長くなるにつれて、年金で生活する方が増えることが示された。また、ひきこもり状態にある方と回答者との関係(続柄)については、ひきこもり状態にある方の子どもの回答者が 15.1% であったことから、従来の親から見た子どものひきこもりという関係だけではなく、子どもから見た親のひきこもりという関係が一定数あることが示された。ひきこもりの長

期高齢化が進む中で、今後こうしたひきこもりの親を持つ子どもが増えていく可能性が考えられる。

ひきこもり状態にある方の約 65～85%は外出しており、過半数以上が家族と会話するが、家族以外の人との会話は家族との会話よりも少なくなる傾向にあった。ひきこもりの状態にあっても約 80%は家族と会話ができている一方で、約 75%は社会参加に関して困難感を抱いており、特に 39 歳以下の若年層でその傾向が強かった。ひきこもり状態の方が最も心配するのは心身の健康であり、就労や生きがい、経済面や親亡き後の生活、交友関係や家族関係を心配しているが、なかでも若年層では就労について心配する割合が高く、中高年齢層では親亡き後の生活、介護について心配する割合が高かった。現状を変えることについては、現状を変えたい気持ちとこのままでよいという気持ちの両方がある方が最も多かった。これらのことから、現状を変えたい気持ちとこのままでよいという気持ちの両方がありながら身動きがとれなくなっていることを踏まえながら、若年層では社会と関わることへの懸念や困りごとに寄り添う支援、中高年層では生活や介護に関する心配に寄り添う支援が求められると考えられる。その際に、会話を交わすことができている家族と本人の関係性を通した支援が必要であると考えられる。

(4) 支援について

社会参加するために地域や社会に必要と思われる条件は、居場所づくりの多様化が最も高かった。どの群も就労先での理解やひきこもりに対する誤解や偏見の解消、相談窓口の敷居の低さ、学びなおしの場、経済支援の拡充、社会保障の充実が上位であった。ひきこもり状態にある方とそのご家族にとって今後充実してほしいと考えている支援は、経済的支援の拡充が最も多く、就労支援や生活支援、親亡きとの支援、精神医療、相談先や居場所等の支援の拡充が上位となった。若年層や 10 年未満のひきこもり状態にある方は就労支援を望む傾向にあり、中高年層や 10 年以上のひきこもり状態にある方は親亡きとの支援を望むことが高まる傾向にあった。

ひきこもり状態にある方の約 70%が相談機関や支援機関を利用しておらず、相談窓口の敷居が低くなることを求めているものの、実際には約 40%が自治体等の相談窓口をまったく知らず、「十分に知っている」と回答した世帯はわずか 3%未満であった。一方で、今後充実してほしいと考えている支援は、経済的支援、生活支援、親亡きとの支援といった制度的・福祉的な体制面へのニーズが、家族や本人の相談窓口の充実よりも多かった。相談機関や支援機関の認知度が低かったことを踏まえると、この結果は本人や家族が相談窓口や実際の支援について把握できていない実態を反映している可能性も考えられる。また、本人が支援を希望する意思について、約半数が「わからない」と回答していた。この結果は、相談窓口を含めた支援の具体的な情報を把握できていないこと、約 40%が現状を変えたい気持ちとこのままでよいという気持ちの両方の思いを抱いていることを反映していること、約 80%以上は家族と会話ができるものの外部の支援に関するることは話題にできず本人

の意思を確認できていない可能性が考えられる。

これらのこと踏まえると、まず必要となるのは本人や家族に対して相談機関や支援機関の具体的な情報を周知することが必要であると考えられる。制度の検討、幅広いニーズに応えられるように各支援機関の体制を整えること、地域や就労先等に対してひきこもりへの理解を促す取組みや情報の共有が求められると考えられる。

2. おわりに

本調査を通して、ひきこもり当事者や家族の客観的状況だけでなく、主観的な状況もある程度明らかになった。当事者の思いを尊重し、生活のペースを配慮しつつ、市をはじめ、行政や関係機関が連携しながら支援の手を差し伸べる必要があり、その際には、まず、ひきこもり当事者や家族が立ち直るためにきっかけを作ることが大切である。

本調査で得られた情報とその分析に基づき、実効性のある福祉施策を講じ、ひきこもり当事者や家族の効果的な支援につなげる意義は大きい。こうした取組みが、誰もが安心して暮らせる地域共生社会の構築に役立つと考えるからである。

3. 東大和市で行っている支援について

ひきこもり相談窓口

ひきこもりなど生きづらさを抱えている方、そのご家族、関係者の方のための相談窓口です。

電話相談・面接相談・メール相談に応じます。

※必要に応じてご自宅への訪問やご自宅以外での面接も行います。

受付時間 午前9時～正午、午後1時～午後4時30分

(土曜日・日曜日・祝日、12/29～1/3を除く)

場所 東大和市役所2階 福祉推進課となり

連絡先 042-567-5077 (専用ダイヤル)

メール rappor@city.higashiyamato.lg.jp

居場所「One's ぶれいす」

ひきこもりなど生きづらさを抱える当事者・経験者の方のための居場所です。

誰かと話してみたり、ひとりでゆっくり過ごしたり、自由に過ごせる空間です。

人と関わることが苦手な方でも安心して過ごせる居場所にしたいと思っています。

※申込不要、出入自由、市外在住の方でも参加できます。

<原則毎月第1木曜日>

開催場所 音楽珈笛 音茶居 (おんがくかふえ むーさい)

東大和市南街5-89-10 Yビル1階

開催時間 午後1時30分～午後4時

<原則毎月第3火曜日>

開催場所 コーシャハイム玉川上水第二コミュニティサロン

東大和市桜が丘3-44-13 21号棟1階

開催時間 午後1時30分～午後4時

※詳細は、東大和市役所または社会福祉協議会のホームページをご覧ください。

東大和市ひきこもり家族会「つながり」

家族会「つながり」では、家族を癒やし、ひきこもり当事者が社会参加できるよう支援することを目的として、定例会や学習会を開催しています。

興味・関心のある方は、ひきこもり相談窓口「042-567-5077(専用ダイヤル)」へお気軽にお問合せください。

定例会の開催

開催日時 原則毎月第4月曜日 午後2時～

開催場所 東大和市社会福祉協議会

ひきこもり UX女子会&ママ会（広域連携事業）

令和5年度から、東大和市では他区市との広域連携事業として、一般社団法人ひきこもりUX会議の運営のもと、ひきこもりUX女子会を開催しています。

「こんな状態にあるのは自分だけではないか」「なんとかきっかけをつかみたい」と思っている女性の方にご参加いただき、「ひとりではない」と思える場をみなさんと一緒に作りたいと思います。どうぞお気軽にご参加ください。

※開催日・開催場所については、東大和市役所のホームページをご覧ください。

4. 資料

東大和市 地域福祉部
福祉推進課 福祉推進係
電話 042-563-2111 (内線1134)
FAX 042-563-5930

調査へのご協力のお願い — “ひきこもり”の実態把握と支援に向けて —

平素より東大和市政にご理解ご協力いただき、ありがとうございます。

このたび、当市では、市内に居住する満15歳以上64歳以下の方が属する世帯を対象に、“ひきこもり”に関する実態調査を実施することとなりました。

“ひきこもり”とは、様々な要因により学校や職場などに通えなくなり、家族以外の人との交流が極端に少なくなり、社会参加をしていない状態を指します。

“ひきこもり”は、生きるためのエネルギーが枯渇した状態であるとも言われておりますが、依然として、甘えや怠けであるとの誤解・偏見もいまだ根強く残っています。“ひきこもり”は、どのような家庭でも起こりうることで、個人や家族だけでなく、社会全体で取り組むべき課題です。

ひきこもり当事者の多くが「なんとかしたい」と悩み、言葉にできない生きづらさや葛藤を抱えています。しかし、その実態を捉えることは難しく、適切な支援が行き届いておりません。こうしたことを踏まえ、“ひきこもり”的現状やニーズを明らかにするために、本調査を行うこととしました。

本調査は、インターネットまたは郵送で回答していただく形式です。調査内容は、“ひきこもり”的方の有無や期間、原因などに関する質問にお答えいただくものです。調査対象は、15歳以上64歳以下の世帯であれば、“ひきこもり”的方がいらっしゃるかどうかに関わらず、すべての世帯にご協力をお願いしています。なお、回答は世帯のどなたかが、ご記入くださるようお願いいたします。

本調査は、無記名であり、世帯や個人を特定できない形で集計・分析し、当市での、今後の“ひきこもり”支援の参考とさせていただきます。

本調査は、“ひきこもり”に関する皆様の貴重なご意見をお聞かせいただくために行うものです。ぜひご協力ををお願い申し上げます。

東大和市ひきこもり実態調査

以下の各質問内容にお答えいただき、同封している返信用封筒にてご提出をお願いいたします。

回答は世帯のどなたかが、ご記入くださるようお願いいたします。

本調査に関しては回答者のプライバシーを保護するために、匿名で回答していただき、記載された情報は、ひきこもりの実態把握やひきこもり支援に関する施策の検討にのみ使用します。

なお、オンラインでも回答が可能です。オンラインの場合は右記のQRコードもしくはURLからアクセスしていただき、右記のパスワードを入力して回答をお願いいたします。(なお、URL、QRコード及びインターネット回答用のパスワードは全世帯共通のため個人を特定することはできないようにしています。)

*回答方法は「問答用紙での返送」もしくは「オンライン」での回答どちらかひとつでお願いいたします。

この調査では、以下に該当する状態を「ひきこもり」と定義しています。

社会的参加（義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家族以外の人との交流など）をしておらず、概ね家庭にとどまり続けている状態（他者と交わらない形での外出をしている場合も含む）。

一度は社会復帰するものの、断続的に家庭に留まり続けてしまっている状態も含みます。

記入は□に✓をお願いします。なお、一部枠内に記入するものがあります。

記入は「□に○」を記入下さい。なお、一部枠内に記入するものがあります。設問において「あなた」とは、記載者を指します。「その方」とは、ひきこもり状態にある方を指します。お答えにくい質問には、無理にお答えいただかなくて構いません。

ア) 基本情報

(1) あなたの世帯でひきこもり状態にある方の人数をお答えください。(1つだけ回答)

1. 0人 ➡ 0人の方は、質問(17)(23)(24)のみお答えください。
 2. 1人
 3. 2人 } ※ひきこもり状態にある方の人数として「2人」あるいは「3人以上」を選んだ場合は、
 4. 3人以上 } 以下の箇間にそのうちの一人についてお答えください。

(2) ひきこもり状態にある方から見て、あなたはどのような関係になりますか。(1つだけ回答)

1. 本人 4. 弟兄姉妹 7. その他
 2. 父母 5. 配偶者・パートナー ⑥. その他
 3. 祖父母 6. 子ども

(3) ひきこもり状態にある方の性別をお答えください。(1つだけ回答)

- 1. 男性 □ 2. 女性 □ 3. その他(どちらともいえない、わからない、答えたくない)

(4) その方の年齢をお答えください。 (1つだけ回答) 治令和5年12月1日現在の年齢をお答えください。

- | | | | |
|------------------------------------|------------------------------------|------------------------------------|-------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 1. 14歳以下 | <input type="checkbox"/> 4. 25~29歳 | <input type="checkbox"/> 7. 40~44歳 | <input type="checkbox"/> 10. 55~59歳 |
| <input type="checkbox"/> 2. 15~19歳 | <input type="checkbox"/> 5. 30~34歳 | <input type="checkbox"/> 8. 45~49歳 | <input type="checkbox"/> 11. 60~64歳 |
| <input type="checkbox"/> 3. 20~24歳 | <input type="checkbox"/> 6. 35~39歳 | <input type="checkbox"/> 9. 50~54歳 | <input type="checkbox"/> 12. 65歳以上 |

(5) 現在、その方と同居している方をお答えください。なお、「配偶者」には、婚姻の届出をしていないが、事実上婚姻と同様の状態にある方を含めます。(複数回答可)

オンラインアンケート

<https://logoform.jp/form/VfYv/428231>

回答入力用パスワード

hychousa



アンケート回答締切日

2024年1月12日(必着)

- (6) その方が最後に卒業(中退を含む)した学校はどこですか。
在学中の方は、現在在学している学校をお答えください。(1つだけ回答)

1. 中学校 4. 高等専門学校・短期大学
 2. 高等学校 5. 大学・大学院
 3. 専修学校・専門学校 6. その他(具体的に: _____)

イ) 外出状況ときっかけ

- (7) その方は普段どのくらい外出しますか。
現在の状態についてお答えください。(1つだけ回答)

1. 普段は家にいるが、自分の趣味に関する用事のときだけ外出する
 2. 普段は家にいるが、コンビニや散歩などには出かける
 3. 自室からは出るが、家からは出ない
 4. 自室からほとんど出ない

- (8) その方が現在の状態となって、どのくらい経ちますか。
(1つだけ回答)

1. 6か月未満 7. 7年～10年未満
 2. 6か月～1年未満 8. 10年～15年未満
 3. 1年～2年未満 9. 15年～20年未満
 4. 2年～3年未満 10. 20年～25年未満
 5. 3年～5年未満 11. 25年～30年未満
 6. 5年～7年未満 12. 30年以上

- (9) その方が現在の状態になったのは、何歳の頃ですか。
(1つだけ回答)

1. 14歳以下 7. 40～44歳
 2. 15～19歳 8. 45～49歳
 3. 20～24歳 9. 50～54歳
 4. 25～29歳 10. 55～59歳
 5. 30～34歳 11. 60～64歳
 6. 35～39歳 12. 65歳以上

- (10) その方が現在の状態になった主な理由は何ですか。
(複数回答可)

1. 学校になじめなかつたこと
 2. 小学校時代の不登校
 3. 中学校時代の不登校
 4. 高校時代の不登校
 5. 大学(専門学校、短期大学を含む)時代の不登校
 6. 受験に失敗したこと(高校・大学等)
 7. 就職活動が上手くいかなかつたこと
 8. 転職になじめなかつたこと
 9. 人間関係が上手くいかなかつたこと
 10. 病気
(病名: _____)
 11. 麻痺
(障害名: _____)
 12. 妊娠したこと
 13. 遺伝したこと
 14. 介護・看護を担うことになったこと
 15. 新型コロナウィルス感染症が流行したこと
 16. いじめ、事件・事故等のトラウマ
 17. その他
(具体的に: _____)
 18. 特に理由はない
 19. わからない

裏面に続きます。→

ウ) 交流・経済状態

(11) 最近6か月間に、その方はご家族と会話をしましたか。
(1つだけ回答)

- 1. よく会話をした
- 2. ときどき会話をした
- 3. ほとんど会話をしなかった
- 4.まったく会話をしなかった

(12) 最近6か月間に、その方はご家族以外の人と会話をしましたか。
(1つだけ回答)

- 1. よく会話をした
- 2. ときどき会話をした
- 3. ほとんど会話をしなかった
- 4.まったく会話をしなかった
- 5. わからない

(13) その方の属する世帯の生計を支えている方の主な収入源は何ですか。
(1つだけ回答)

- 1. 就労・事業による収入(農業収入を含む)
- 2. 預金やその利息、財産からの収入(株の配当や不動産賃料など)
- 3. 年金
- 4. 生活保護
- 5. その他(具体的に:)
- 6. わからない、答えられない

エ) 心配ごとや自己認識

(14) その方が心配していることは何だと思いますか。
(複数回答可)

- 1. 就学
- 2. 就労
- 3. 経済的な事柄
- 4. 心身の健康
- 5. 家族関係
- 6. 戦争関係
- 7. 交友関係
- 8. 交際、結婚
- 9. 出産、育児
- 10. 生きがい
- 11. 介護
- 12. 長生き後の生活
- 13. 特にない
- 14. わからない
- 15. その他()

(15) その方は現状をどのように考えていると思いますか。
(1つだけ回答)

- 1. 現状を変えたい
- 2. このままでよい
- 3. 現状を変えたい気持ちとこのままでよいという気持ちの両方がある
- 4. わからない

オ) 社会参加について

(16) その方は社会参加に関して困難を感じていると思いますか。
(1つだけ回答)

- 1. まったく困難を感じていない
- 2. あまり困難を感じていない
- 3. やや困難を感じている
- 4. とても困難を感じている

(17) 世帯にひきこもり状態の方がいる・いないにかかわらずお訊きします。一般的に、ひきこもり状態にある方が社会参加をするためには、地域や社会に必要な条件は何だと思いますか。
(複数回答可)

- 1. 相談窓口の敷居の低さ
- 2. 就労先での理解
- 3. 社会保障の充実
- 4. 経済支援の拡充
- 5. ボランティア等の社会参加の機会
- 6. 居場所づくりの多様化
- 7. 学びなおしの場
- 8. ひきこもりに対する誤解や偏見の解消
- 9. その他(具体的に:)

力) 必要なサービス

(18) 再びあなたの世帯に属するひきこもり状態にある方についてお聞きします。その方はひきこもりに関する相談機関や支援機関等(例: 東京都ひきこもりサポートネット、東京都若者総合相談センター(若ナビα)、地域若者サポートステーション、東京しごとセンター、わかものハローワーク、保健所、東京都立精神保健福祉センター、東京都発達障害者支援センター、東京都教育相談センター、NPO法人等の民間支援団体)を知っていますか。(1つだけ回答)

- 1.まったく知らない
- 2.あまり知らない
- 3.いくつか知っている
- 4.十分に知っている

(19) その方がひきこもりに関する相談機関や支援機関等を利用したことはありますか。(1つだけ回答)

- 1.継続的に利用している(その理由:)
- 2.利用したが継続的ではない(その理由:)
- 3.利用していない(その理由:)

(20) これから生活していくうえで、その方は何らかの支援を望んでいると思いますか。(1つだけ回答)

- 1.はい
- 2.いいえ
- 3.わからない

(21) その方にあって今後充実してほしいと考える資源・支援は何ですか? その方以外が回答者の場合、その方から見て必要と思われるものに回答してください。
(複数回答可)

- 1.家族支援(家族会や家族の個別相談)
- 2.居場所支援(ひきこもり状態にある方等の居場所)
- 3.相談支援(ひきこもり状態にある方の相談)
- 4.生活支援
- 5.経済的支援
- 6.精神医療(薬物療法、精神療法、デイケア、訪問診療等)
- 7.就労支援(就労の相談、サポート)
- 8.オンライン支援(自宅からでも受けられる支援)
- 9.訪問支援(家族や本人のニーズに合った訪問、引き出すことを目的としない訪問)
- 10.ピアサポート(ひきこもり当事者、経験者との交流)
- 11.親亡きあとの支援
- 12.その他(具体的に:)

(22) ご家族の方にお聞きします。その方のご家族として今後充実してほしいと考える資源・支援は何ですか? ご家族以外が回答者の場合、ご家族から見て必要と思われるものに回答してください。(複数回答可)

- 1.家族支援(家族会や家族の個別相談)
- 2.居場所支援(ひきこもり状態にある方等の居場所)
- 3.相談支援(ひきこもり状態にある方の相談)
- 4.生活支援
- 5.経済的支援
- 6.精神医療(薬物療法、精神療法、デイケア、訪問診療等)
- 7.就労支援(就労の相談、サポート)
- 8.オンライン支援(自宅からでも受けられる支援)
- 9.訪問支援(家族や本人のニーズに合った訪問、引き出すことを目的としない訪問)
- 10.ピアサポート(ひきこもり当事者、経験者との交流)
- 11.親亡きあとの支援
- 12.その他(具体的に:)

(23) 東大和市がひきこもり支援として実施している取り組みで知っているものに回答してください。(複数回答可)

- 1.ひきこもり家族会「つながり」
- 2.ひきこもり相談窓口
- 3.居場所「One's がれいす」
- 4.どれも知らない

(24) その方やご家族にとって、求めているサービスや支援があれば自由にご記入ください。また、ひきこもり状態にある方がいない世帯の方も、どのようなサービスや支援があるとよいと思うかご記入ください。

令和 5 年度
東大和市ひきこもり実態調査
結果報告書

令和 6 年 3 月

発 行 東大和市
東京都東大和市中央 3-930
編 集 東大和市地域福祉部福祉推進課

